

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第371集

# 河崎の柵擬定地発掘調査報告書

床上浸水対策特別対策事業関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# **河崎の柵擬定地発掘調査報告書**

**床上浸水対策特別対策事業関連遺跡発掘調査**

## 序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人達が遺した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

また一方では、幹線道路網や農業基盤整備など、社会資本を充実させることもまた行政上の大事な施策であり、このため埋蔵文化財の保存・保護と調整・調和のとれた地域開発の発展が今日的な課題でもあります。

このような見地から、財団法人岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会生涯学習文化課による調整と指導のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅していく遺跡について発掘調査を行い、その記録保存を残す措置をとってまいりました。

本書は、北上川の洪水対策堤防建設整備事業に関連して、平成12年度に行われた県南部の川崎村に所在する河崎の橋擬定地調査結果について収録したものであります。

調査の結果、弥生時代から近世まで多時期に亘る遺物と遺構が検出され、近世の掘立柱建物跡を中心とした集落跡であることが明らかになりました。また、当地方では出土が希な弥生時代前期の土器は、県南地域における土器編年を考える上で貴重な資料を提供したと思われます。

この本書が広く活用され、斯学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する关心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に協力とご支援を賜りました国土交通省東北地方整備局岩手工事務所、川崎村教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申しあげます。

平成13年9月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 村上勝治

## 例 言

1. 本報告書は、岩手県東磐井郡川崎村字川崎83-1ほかに所在する河端の標記定地発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、床上浸水対策特別対策事業に伴い、県教育委員会生涯学習文化課・国土交通省東北整備局岩手工事事務所の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
3. 岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は、以下のとおりである。

遺跡登録台帳番号……OE 09-1173

遺跡略号……………KSG 00

4. 野外の調査期間・調査面積と調査担当者は、以下のとおりである。

調査期間 平成12年4月18日～11月1日

調査面積 4,680m<sup>2</sup>

担当者 高橋義介・島原弘征

5. 調査の室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。

整理期間 平成12年11月1日～平成13年3月31日

担当者 高橋義介・島原弘征

6. 本報告書の原稿執筆は高橋義介、図版作成を島原弘征が分担している。

7. 座標原点の測量および空中写真撮影は、次の機関に依頼した。

座標原点の測量…………幡総合土木コンサルタント

8. 本報告書の作成にあたり、次の方々ならびに機関からご指導とご協力をいただいた。(敬称略)

吉田努・桐生正一(滝沢村教育委員会)、熊谷常正(盛岡大学)、齋藤邦雄・日下和寿(岩手県教育委員会)  
土方和行・金今壽信(川崎村教育委員会)、岩手県立博物館

9. 野外調査にあたっては、丸一木産、葛西直人氏をはじめとする門崎・薄衣地区の方々に多大なるご協力をいただいた。

10. 調査成果の一部は、『岩手県埋蔵文化財調査略報(平成12年度分)』に概略を発表しているが、本報告書の内容が優先するものである。

11. 土層観察の土色は、『新版標準土色帳』(小山正忠・竹原秀雄:1992)によった。

12. 本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行のものであり、図中に図幅名と縮尺を記している。

13. 本遺跡から出土の遺物および調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管・管理している。

## 目 次

序

例言

[本文]

I 検査に至る経過	3
II 遺跡の位置と環境	3
1. 遺跡の位置	3
2. 遺跡周辺の地形と地質	5
3. 基本層序	7
4. 周辺の遺跡	7
III 検査の方法と室内整理	11
1. 野外検査の方法	11
2. 室内整理の方法	12
IV 検出された遺構と遺物	13
1. 概要	13
2. 挿立柱建物跡	13
3. 門跡	14
4. 土坑	18
5. 溝跡	18
6. 溝状遺構	32
7. 柱穴状土坑	36
8. 遺構出土遺物	36
V まとめ	44
1. 遺構	44
2. 遺物	46
報告書抄録	76
職員一覧	77

〔図 版〕

第1図 岩手県図にみる遺跡の位置	1	第9図 R B01・02掘立柱建物跡、 出土遺物	15
第2図 遺跡周辺の地形図	2		
第3図 遺跡周辺の地形分類図	4	第10図 R B03掘立柱建物跡、出土遺物	16
第4図 基本土層柱状図	6	第11図 R Z門跡	17
第5図 周辺の遺跡分布図	8	第12図 R D土坑(1)	26
第6図 遺構配置図	10	第13図 R D土坑(2)	27
第7図 グリット配置図	11	第14図 R D土坑(3)	28
第8図 凡例	12	第15図 R D土坑(4)	29

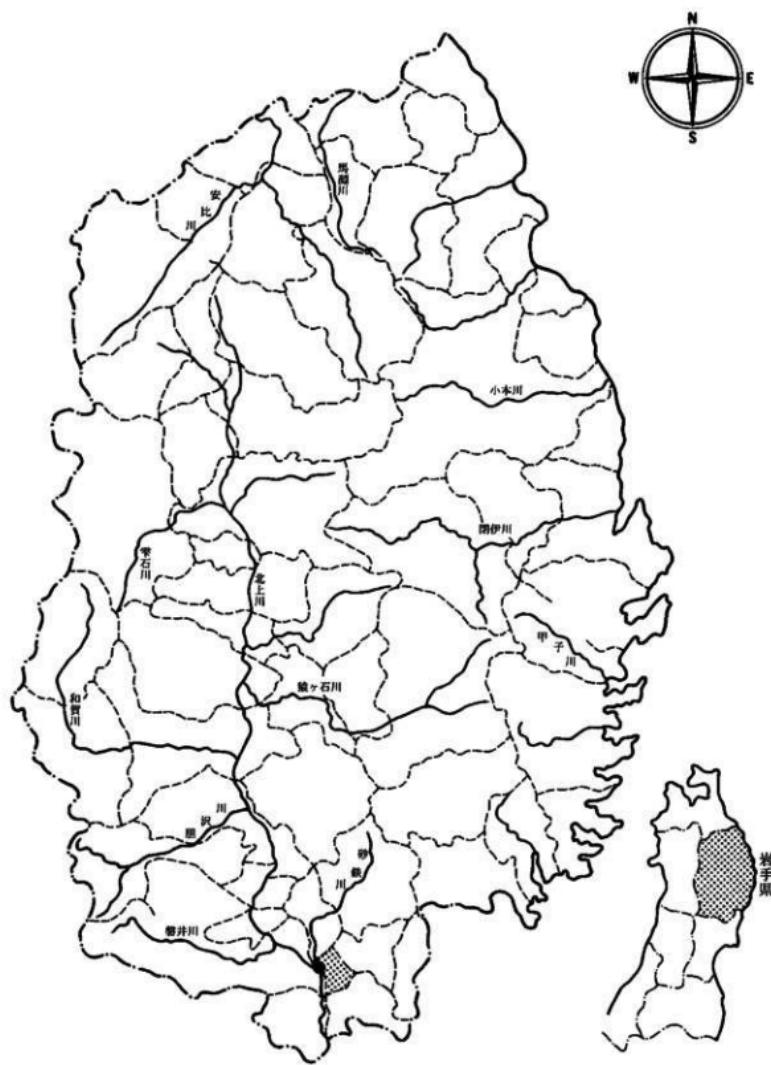
第16図	R D土坑(5) .....	30	第22図	遺構外出土遺物(1) .....	40
第17図	R D土坑(6)・出土遺物 .....	31	第23図	遺構外出土遺物(2) .....	41
第18図	R G01・02溝跡・出土遺物 .....	33	第24図	遺構外出土遺物(3) .....	42
第19図	R Z01~07溝状遺構 .....	34	第25図	遺構外出土遺物(4) .....	43
第20図	R Z08~34溝状遺構・出土遺物 .....	35	第26図	遺構外出土遺物(5) .....	44
第21図	R Z柱穴状土坑・出土遺物 .....	38			

[ 表 ]

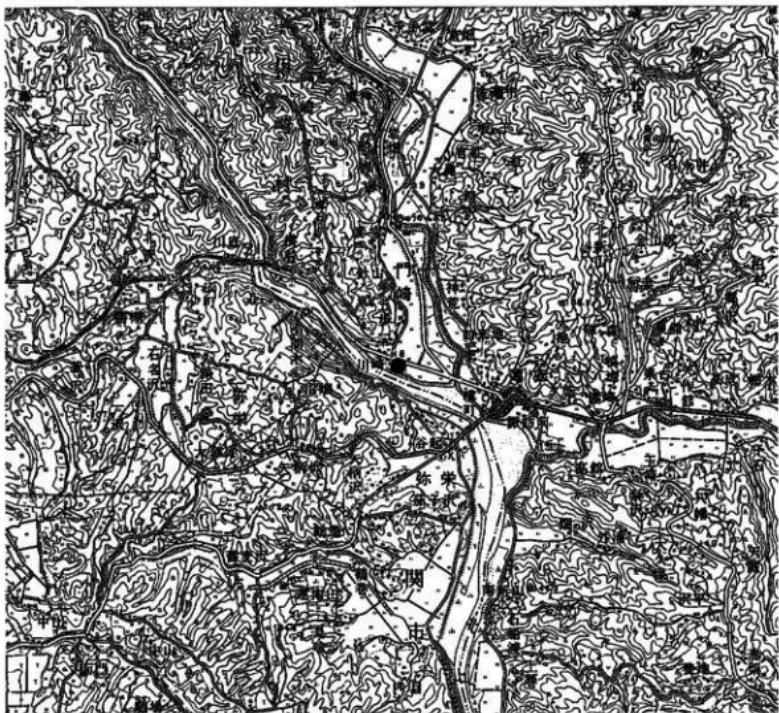
第1表	周辺の遺跡一覧 .....	9	第4表	遺構外出土鉄製品一覧 .....	37
第2表	R D土坑出土鉄製品一覧 .....	18	第5表	R Z柱穴状土坑一覧 .....	39
第3表	溝跡出土鉄製品一覧 .....	25			

[写真図版]

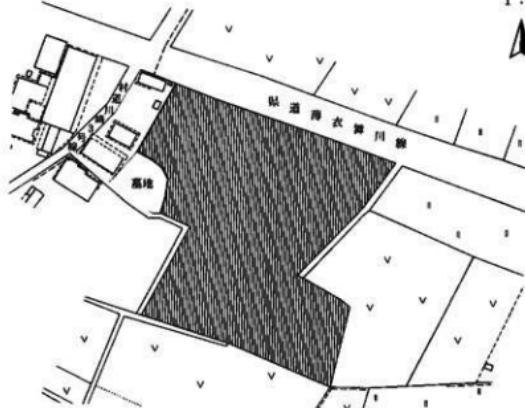
写真図版 1	遺跡近景 .....	49	写真図版15	R D土坑(8) .....	63
写真図版 2	R B01掘立柱建物跡 .....	50	写真図版16	R D土坑(9) .....	64
写真図版 3	R B02掘立柱建物跡 .....	51	写真図版17	R D土坑(10) .....	65
写真図版 4	R B01~03掘立柱建物跡 .....	52	写真図版18	R G溝跡 .....	66
写真図版 5	R B03掘立柱建物跡(1) .....	53	写真図版19	R Z溝状遺構(1) .....	67
写真図版 6	R B03掘立柱建物跡(2) .....	54	写真図版20	R Z溝状遺構(2) .....	68
写真図版 7	R Z門跡・柱穴状土坑 .....	55	写真図版21	R Z溝状遺構(3) .....	69
写真図版 8	遺物出土状況・R D土坑(1) .....	56	写真図版22	R Z溝状遺構(4) .....	70
写真図版 9	R D土坑(2) .....	57	写真図版23	R Z柱穴状土坑 .....	71
写真図版10	R D土坑(3) .....	58	写真図版24	遺構内出土遺物(1) .....	72
写真図版11	R D土坑(4) .....	59	写真図版25	遺構内出土遺物(2) .....	
写真図版12	R D土坑(5) .....	60		遺構外出土遺物(1) .....	73
写真図版13	R D土坑(6) .....	61	写真図版26	遺構外出土遺物(2) .....	74
写真図版14	R D土坑(7) .....	62	写真図版27	遺構外出土遺物(3)・鉄滓他 .....	75



第1図 岩手県図にみる遺跡の位置



1 : 50,000 一四・千五



第2図 遺跡周辺の地形図

## I 調査に至る経過

砂鉄川流域は、岩手県南部に位置し、「一関遊水地事業」箇所から約10km下流の諏訪前地点直上流で北上川に合流する左支川である。流域面積は375.01km<sup>2</sup>で流域は典型的な山地流域であるが、最下流部は幅数100mの細長い冲積地となり、川崎村・東山町の貴重な宅地や耕作地として利用されている。

河道及び沿川の状況は、標高がTP 13.0~14.0程度と低く、蛇行が著しい無堤状態となっていることから、洪水時には北上川本川の背水の影響により河川水位が上昇し、水害常襲地帯となっている。

当地区的洪水被害の特徴としては、北上川の水位上昇による被害のため、冠水時間が3~4日と非常に長く、また、地形条件・土地利用条件から集落等が分断され孤立する家屋が多く壊滅的被害が発生する。このような状況を早期に解消するため、平成11年度~15年の5カ年で重点的に投資を行い、築堤、河道掘削、排水樋管、揚水機場、橋梁架け替え、道路付け替え等の工事を実施し、安全な川づくりを実施するために、堤防の法面を極力緩やかにし、なるべく圧迫感のないようにする。また、緩やかにすることにより、砂鉄川に近づきやすいようにする。法面部分には、堤防の機能を侵さない形で植栽等を実施し、親しみのある空間を造る工事を実施している。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が分布調査を実施し、1遺跡が確認されている。その結果に基づいて岩手県教育委員会は国土交通省岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることにした。

これにより岩手県教育委員会は、平成12年度埋蔵文化財調査事業について平成12年1月24日付け「教文第074号」により財団法人岩手県文化振興事業団へ通知し、それを受けた当埋蔵文化財センターは、平成12年4月1日付けの委託契約に基づいて平成12年4月6日から河崎の柵擬定地の発掘調査に着手した。当初調査面積は4,680m<sup>2</sup>で終了面積は、同じく4,680m<sup>2</sup>である。なお、平成12年12月の試掘調査により、この箇所以外の同遺跡の発掘調査の必要性が確認されたが、この調査については平成14年度以降に継続されることになった。

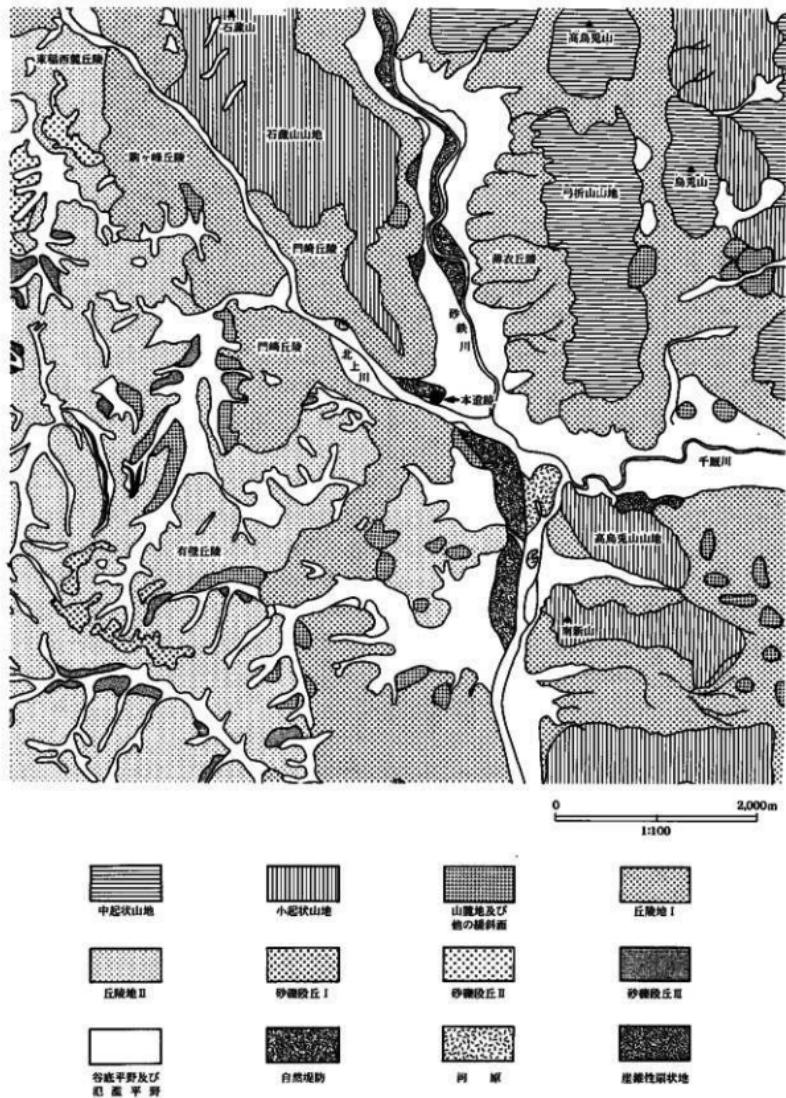
(国土交通省岩手工事事務所)

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置

河崎の柵擬定地が所在する川崎村は、県南部東磐井郡の西側に位置している。遺跡は第2図に示すように川崎村役場の西北西側約1kmにあり、北上川の左岸に形成された河岸段丘上に立地する。国土地理院発行の5万分の1地形図「一関」「千厩」N J-54-14-11(一関11・15号)の図幅に含まれ、北緯38度54分5秒、東經141度15分23秒付近にあたる。調査区の現状は宅地跡と畠地で、標高が18.60~19.80mを測る。

川崎村は国道284号(気仙沼街道)の要衝であり、東側は東磐井郡千厩町、西側が一関市・西磐井郡花泉町、南側が東磐井郡藤沢町、北側が東磐井郡東山町の1市4町と隣接している。村の総面積は42.49km<sup>2</sup>、東西約6km、南北9.2kmの県内最小の村である。村域の大部分は山林で占められ、耕地は面積の1割にも満たなく千厩・砂鉄川の河川沿いに見られるだけである。また、両河川が北上川に注ぐ河口にあたるため、水害の常襲地帯である。昭和31年9月に薄衣・門崎両村の合併により、河崎の柵にちなみ『川崎村』になり現在に至っている。村内の人口は4,909人(平成12年)である。



第3図 遺跡周辺の地形分類図

## 2. 遺跡周辺の地形と地質

北上山地の西南麓に位置する川崎村は、村の西側を南流する北上川の東岸に立地している。中央部を千厩川が東から西側へ貫流し、西側を砂鉄川が南流して西端の薄衣地内で北上川に注いでいる。北上川は県北部の岩手町御堂観音境内にその源を発し、宮城県石巻市で太平洋に注ぐ延長243km、流域面積10,720km<sup>2</sup>の東北地方第一級の河川である。この流域は盛岡市以北を上流域、盛岡から県南の前沢町間が中流域、前沢町以南を下流域に区分されており、川崎村は下流域の上部にあたっている。

北上川中流域の地形は、背後に控える山地構造の違いによって東西で対照的な様相を示している。西側の新第三系および火山岩類を主体とする奥羽山脈は、各支流に多量の土砂を供給し大小の扇状地が複合する広い平野部を西岸に作り出している。これらの扇状地は更新世中・後期に形成されたもので、支流によって開析されて段丘化している。これに対して老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原化した東側の北上山地では、山地に続く丘陵縁辺部に小規模な段丘と沖積地が見られるだけである。

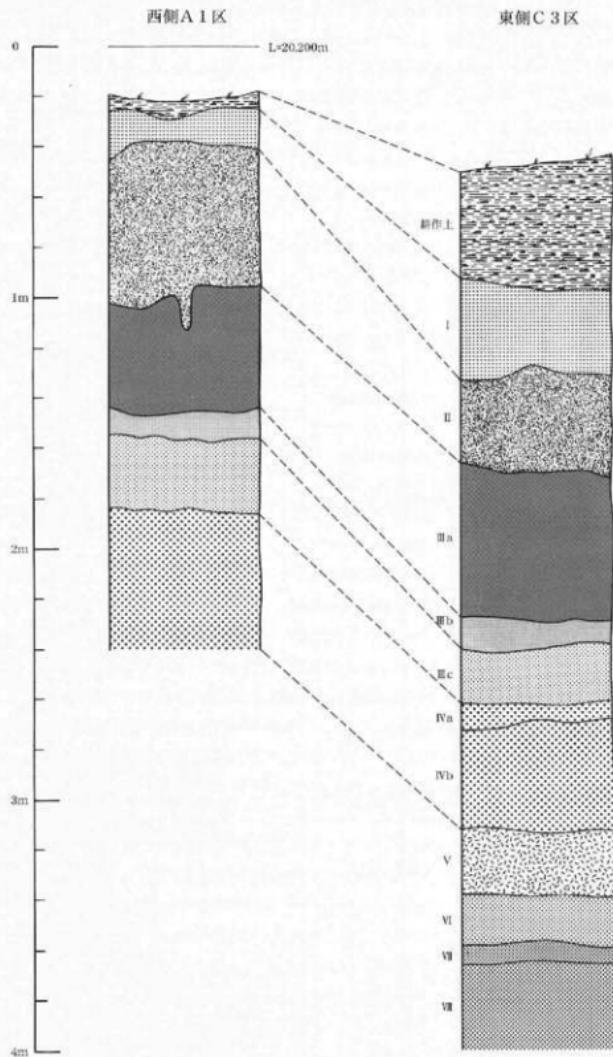
遺跡のある下流域上部は、北上河谷帯(北上盆地)の南端部にあたり、東側が北上山地西縁部に接続している。西縁部は標高が600m未満の東福山山地、石巻山山地とそれらに続く東福西麓丘陵、駒ヶ峰丘陵、門崎丘陵などから成っており、南側で有壁丘陵に連続している。有壁丘陵は北上川を挟んで北上山地に接しているために、県中央部を南流してきた北上川は流れを阻まれて、北上山地西縁部と有壁丘陵に挟まれた孤擣寺渓谷で南東方向に流れを変えていく。孤擣寺峡谷の西側は、北上川に向かって東流する磐井川によって形成された河岸段丘が奥羽山脈へと続き磐井川の左岸に衣川丘陵、右岸に達古袋丘陵が広がり南東側で有壁丘陵に続いている。

遺跡周辺の地勢を概観すると比較的標高が低い山稜が連なっており、北東側に鳥兎山(標高325m)、北北東側に高鳥兎山(標高288m)、北北西側に石巻山(標高358m)、南南東側に南新山(標高144m)が望まれる。また、北北西側には東福山(標高596m)の山塊から南東方向に延びる石巻山山地、それに続く門崎丘陵、砂鉄川を挟んだ北東側には弓折山山地と薄衣丘陵が続いている。本遺跡は前述した門崎丘陵東側の自然堤防上に立地しており、北上川と砂鉄川の合流点から西北西側に600mの地点にある。

地質は北上河谷帯西縁を南北に縱断する盛岡-白河構造線によって東西に大きく分けられる。表層地質で見ると西側は火山性の安山岩質岩石が広く分布し、中に中新世の砂岩、鮮新世の泥岩・砂岩、洪積世の砂礫が含まれる。これに対し東側は、古生代・中生代の地層や鮮新世以降の花崗岩類と砂岩等で構成されている。砂鉄川流域には、石炭紀・二疊紀の長坂石灰岩が良く発達している。

### 〈引用参考文献〉

1. 一関市史編纂委員会 1978 『一関市史』第1巻通史
2. 岩手県農政部北上山系開発室 1975 『北上山系開発地域土地分類基本調査千葉』
3. 岩手県農政部北上山系開発室 1978 『北上山系開発地域土地分類基本調査一関』
4. 朴沢正耕・他 1979 『岩手県文化財調査報告書第33集』 岩手県教育委員会
5. 犹野敏男・他 1980 『岩手県文化財調査報告書第54集』 岩手県教育委員会



第4図 基本土層柱状図

### 3. 基本層序

調査区内の現況は宅地跡と畠地であるが、耕作土下位の層序は旧地表面の改変が著しい箇所もあり一樣ではない。第4図は西側A1区と東側C3区で観察された土層断面図である。層序は上位から順にⅠ層～Ⅶ層に大別される。構成はⅢ層中位からⅣ層上面で多く検出している。

Ⅰ層：暗褐色砂質土(10YR3/3～4/3) 層厚は10～30cmで微量の炭を含み、全体に堅く締まっている。長芋や牛蒡の収穫時におけるトレンチャ（深耕機械）による擾乱が著しい。

Ⅱ層：黒褐色砂質土(10YR3/2) 層厚は30～50cmでⅠ層に類似し、堅く締まっている。Ⅲa層起源の砂土を小ブロックで1%混在し、上位から中位にかけて炭が散在している。中位から下位の一部には十和田a降下火山灰がブロック状に含まれ、西側のA1区で厚さ5cm前後の広い分布が見られる。

Ⅲ層：褐色～にぶい黄褐色砂土の3層に細分できる。

a：にぶい黄褐色砂土(10YR2/2～3/2) 層厚は40～60cm。締まりはほとんどなく、ラミナ状堆積物層を10枚数堆積している。

b：褐色砂土(10YR4/4～4/6) 層厚は8～10cm。全体に堅く締まり、炭、水酸化鉄、グライ化した土を少量含んでいる。

c：にぶい黄褐色～褐色砂土(10YR4/3～4/4) 層厚は20～38cm。締まりはなく、Ⅲa層に類似している。東側のA1区では褐色砂土が主体で、ラミナ状堆積物層を10枚数含む。

Ⅳ層：にぶい黄褐色シルトで構成され、2層に細分できる。

a：にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) 層厚は8～10cm。やや締まりと粘性があり、黄褐色砂質シルト(10YR5/6)を40%と炭を含んでいる。

b：にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) 層厚は18～34cm。全体的に堅く締まり、一部にⅢb層起源の互層が見られる。炭、水酸化鉄、グライ化した土を含んでいる。

Ⅴ層：暗褐色粘土(10YR3/3～3/4) 層厚は40～52cmで全体に堅く締まり、微量の炭を含んでいる。

VI層：褐色砂土(10YR4/4) 層厚は35～40cm前後を測る。砂層で金雲母を含み、水酸化鉄が厚さ1cm前後の互層で堆積している。

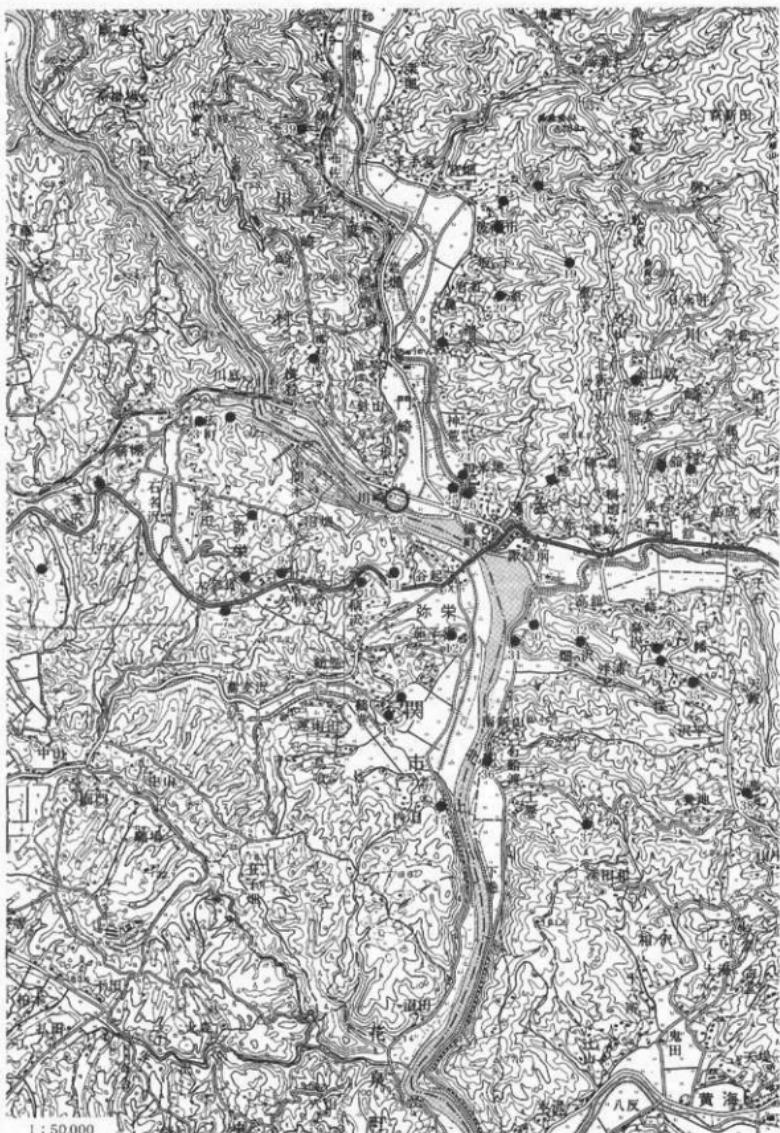
VII層：暗褐色粘土(10YR3/4) 層厚は12～15cmで、褐色砂土との混合土である。

VIII層：暗褐色砂土(10YR3/4) 砂層でVI層に類似しているが、層厚は確認していない。

### 4. 周辺の遺跡

川崎村内における遺跡は、岩手県遺跡台帳平成11年度によれば38ヵ所登録されている。第5図に示すよう河崎の櫛擬定地周辺遺跡(一関市を含む)の大部分は、北上川とその支流である砂鉄川と千厩川の段丘縁辺部、および開析された小支谷に沿って分布している。時代別にみると縄文時代が20ヵ所、平安時代が4ヵ所、中世が11ヵ所、近世が3ヵ所である。各時代の遺跡分布域の相違は、立地する地形面と大きく係るものと思われる。村内での発掘調査は、昭和45年(1970)に調査が行われた布佐洞窟遺跡が代表的なものである。

旧石器時代の遺跡と遺物は、現在まで発見されていないために詳細が不明である。縄文時代の遺跡は、中・後期が金山沢遺跡(22)、後期が如来地遺跡(26)・布佐洞窟遺跡(39)、後・晚期が大池遺跡(27)があげられる。布佐洞窟からは、ストレート質石灰岩と扁平の川原石が敷きつめられた敷石様配石構造が2ヵ所、炉跡を1基検出している。遺物は土器小破片、人骨、自然遺物が出土している。人骨は散乱状態で3体分出土しており、性別は不明で抜歯の風習が認められる。自然遺物は貝類(鳥貝、蛤、川真珠貝等)、獸骨類(猪・



第5図 周辺の遺跡分布図

鹿)、植物遺体(鬼胡桃)である。大池遺跡からは、後期の破片と晚期の大洞式の完形の浅鉢・鉢・壺の土器と、石錐・石棒・石槍・石礫の石器類が出土している。

弥生時代の遺構は検出されていないが、本遺跡から土器(高杯、甕、蓋)と凹石を1点出土している。遺物は散発的に僅かであるものの、この時代にも人々の生活が営まれていた痕跡を読みとれる。

古墳時代～平安時代の遺跡は全体に希薄である。本遺跡からは平安時代の土師器壺・甕と12世紀後半の平泉櫛之御所跡と同様のかわらけ破片が出土しており、平泉文化の影響が当地方まで及んでいた事が十分にうかがわれる資料である。

河崎の柵に関しては、前九年の役で安倍貞が天喜5(1057)年11月に四千人余の兵で源頼義(陸奥守兼鎮守府将軍)率いる軍と黄海(現在藤沢町)で迎え討ち戦いに勝利したと陸奥説記にあり、貞軍が營所としたのがこの地域であると言われている。また、村内には安倍氏や源頼義・義家に関わる地名・伝承が数多くあるものの、この時期における郡域の様子は不詳である。

その後文治5(1189)年に平泉の藤原氏が滅亡した後、当地方の領主となつたのは御家人葛西三郎清重である。清重は下総國(現在千葉県)葛西庄の領主で、源頼朝の奥州征伐に従軍し歴功を立てたことにより、奥州統奉行と検非違使管領に任せられている。清重は建久元(1190)年に奥州に赴任し、平泉の高館に居を構え所領が5郡229郷を数える。

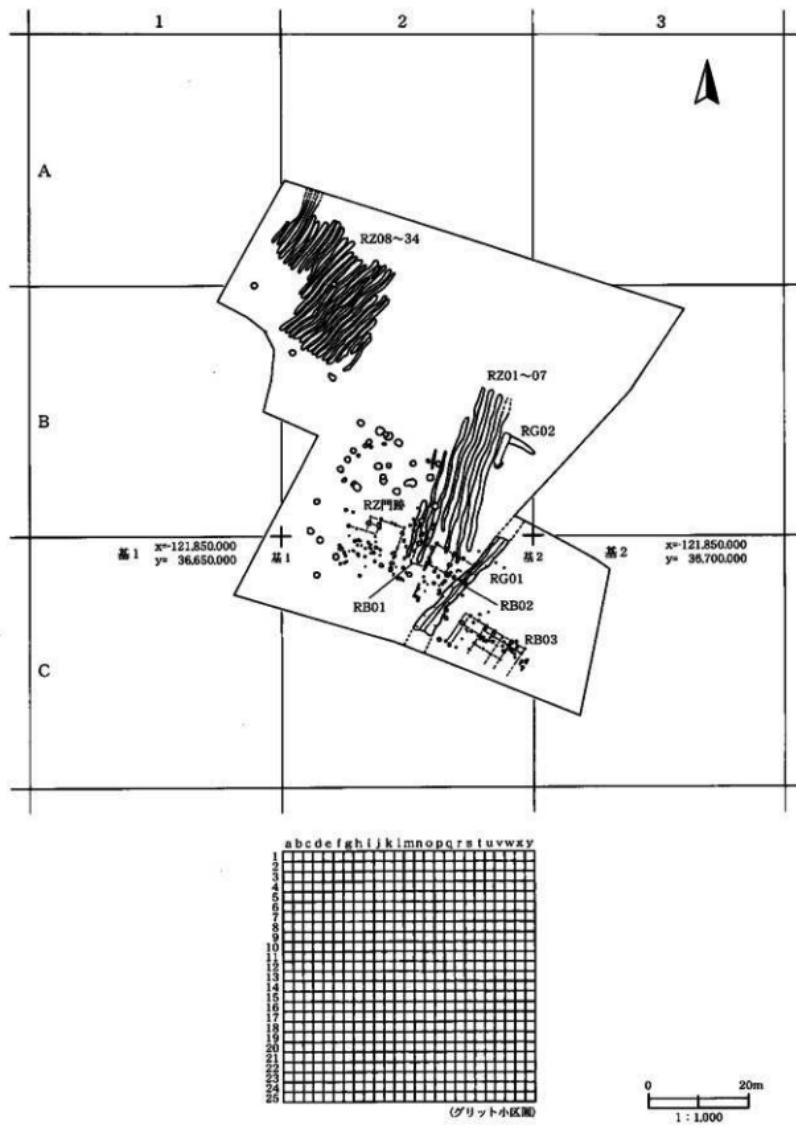
葛西氏は初代清重から17代清信が天正18(1590)年、豊臣秀吉の奥州仕置きにおいて滅亡するまでの約400年間(鎌倉・南北朝・室町時代)の長きに亘って当地方を治めているが、領内における城館の配置や始封転封時期、継続状況も明らかではなく不明である。

中世城館は揚生古城、揚生新城、古館、富沢、西風城、小館、門崎城、河崎櫛、薄衣城、高館等があるものの、調査例がなく構造や縄張り、中世資料による城館主の命脈や沿革は不明な点が多い。

また、近世城館は外山館、泉館、矢作館の3カ所で確認されているもの、中世城館と同様に全容が不詳である。

第1表 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	種別	時代/備考	No	遺跡名	種別	時代/備考
1	鶴子	散布地	縄文/陶文土器(前・中期)	21	長平	散布地	縄文/陶文土器(後・後期)/石器
2	横石	散布地	縄文/石器	22	龜山沢	散布地	縄文/陶文土器(中・後期)/石器
3	細越	散布地	縄文/陶文土器/石斧	23	汚跡の柵擬定地	柵柵跡	縄文/弥生/平安/近世
4	上の場	散布地	縄文/石斧	24	高畠	集落跡	平安/土師器
5	岩築	散布地	平安/土器器/須恵器	25	河崎櫛	城館跡	中世
6	小間木	散布地	縄文/石剣/石棒	26	姫来地	散布地	縄文/陶文土器(後期)
7	大奈良Ⅰ	散布地	平安/須恵器	27	大池	散布地	縄文/陶文土器(後・後期)/石器
8	大奈良Ⅱ	散布地	縄文/陶文土器(晚期)/石棒	28	泉田館	城館跡	近世
9	大奈良Ⅲ	散布地	縄文/石器	29	矢作館	城館跡	近世/堀
10	揚生古城(宝館)	城館跡	中世末/圓郭・空堀	30	古館	散布地	縄文/陶文土器
11	揚生新城(宝館)	城館跡	中世末/圓郭・空堀	31	薄衣城(米倉城)	城館跡	中世/主郭・物見台
12	古館	城館跡	中世末/連郭・空堀	32	高館	城館跡	縄文/中世/陶文土器/主郭・堀切
13	富沢	散布地		33	草	散布地	縄文/陶文土器
14	古館(富沢城)	城館跡	中世末/平掘	34	十二人塚	塚	縄文/陶文土器
15	西風城(奈良井城)	城館跡	中世末/平掘・空堀	35	大久保	散布地	縄文/陶文土器
16	小館	城館跡	中世	36	石船城	散布地	縄文/陶文土器
17	古館	城館跡	中世/郭・土壘・空堀	37	笛ノ平	散布地	縄文/陶文土器
18	門崎城	城館跡	中世/郭・空堀・羅郭	38	赤堀	散布地	縄文/陶文土器
19	外山館	城館跡	近世	39	布佐洞窟	洞窟	縄文/陶文土器(後期)/人骨三体
20	虹	散布地	縄文/陶文土器(中・後期)/石器				



第6図 遷構配置図

### III 調査の方法と室内整理

#### 1. 野外調査の方法

##### (1) 調査区の区割設定

河崎の柵擬定地の区割設定は、平面直角座標第X系の $X = -121,850.000$ 線上に載る基準点1・2を設置し、この2点間を見通す直線と基準点を通り、これに直交する直線を座標の基軸線とした。基軸点1を原点として遺跡全体を一辺50m×50mの大区画に区割を行い、さらに大区画を $2 \times 2$ mの25小区画に細分している。大区画は北から南側にアルファベットの大文字A～C、東西方向に1～3の数字を付している。また、小区画は西から東側に数字の1～25、北から南側に小文字のアルファベットa～yを与えている。調査区の名称は大区画と小区画の組合せで、A 1 a 1・B 1 y 25というように呼称している。調査区内における各基準点の成果値と高さ(標高)は、次のとおりである。

基準点1  $X = -121,850.000$ ,  $Y = 36,650.000$ ,  $H = 18.929$ m

基準点2  $X = -121,850.000$ ,  $Y = 36,700.000$ ,  $H = 19.822$ m

補 点1  $X = -121,874.000$ ,  $Y = 36,700.000$ ,  $H = 19.234$ m

補 点2  $X = -121,810.000$ ,  $Y = 36,700.000$ ,  $H = 18.666$ m

##### (2) 粗掘りと遺構検出

本調査に先立ち平成10年4月に県教委生涯学習文化課による、試掘調査(幅2mのトレンチ)が実施されている。その結果、表土下数10cmの面で近世の掘立柱建物跡を複数面で検出し、さらに1m下層から10世紀の火山灰がブロック状で確認した。これらから複数期に亘る近世の集落跡をはじめとする様々な遺構群の所在が予想された。今年度の調査区は、一部遺構の分布がトレンチである程度把握されていたことから、表土除去と粗掘りは重機(ユンボ)を使用することとし、その後人力による遺構検出作業を行っている。

##### (3) 遺構の命名

検出された遺構の命名は次のアルファベットの略号を使用している。また、種別を決めかねた遺構については、全てR Zとして扱っている。

掘立柱建物跡……RB 土 坑……RD 溝 跡……RG その他の遺構……R Z

##### (4) 遺構の精査と実測

検出された土坑と柱穴状土坑の精査は2分法で実施している。遺構の平面実測は従来の簡易造り方測量で行い、溝跡と溝状遺構は平板測量で作成した。各遺構の実測図縮尺は1/20を基本とし、溝跡と溝状遺構の平面図は1/100である。遺構内から出土した遺物は必要に応じて番号を付し、写真撮影と記録後に取り上げている。

##### (5) 写真撮影

野外調査における写真撮影は、6×7cm判カメラ1台(モノクロ)と35mm判カメラ2台(モノクロ・リバーサル)を使用し、遺構検出、遺物の出土状況、断面、掘り上げ等を必要に応じて行っている。他にポラロイドカメラ1台をモデル的に活用している。



第7図 グリッド配置図

#### (6) 広報活動

埋蔵文化財に対する啓蒙活動は、7月18日(火)に川崎中学校『ふるさとの誇り再発見少年少女教室』の体験学習見学会、8月10日(木)に川崎村銚子地区自治会の遺跡見学会、10月6日(金)に今年度の調査成果を報告する現地公開を開催している。

## 2. 室内整理の方法

### (1) 作業手順

遺物の整理作業は現場で残った遺物の水洗から行い、次に①注記、②仕分け・登録、③接合・復元、④拓本、⑤写真撮影、⑥実測、⑦トレース、⑧図版作成の順に行っている。

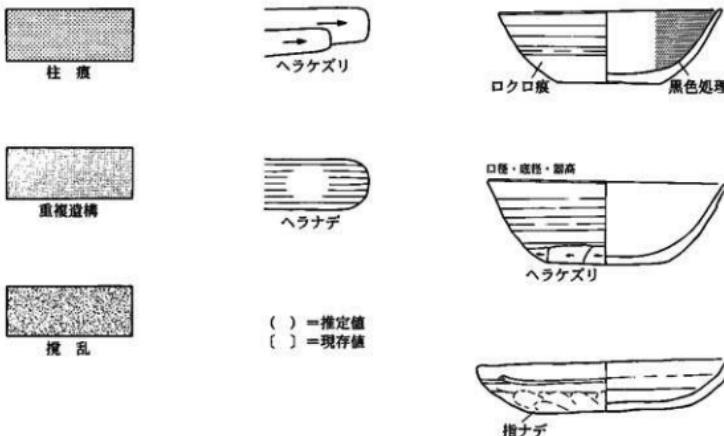
遺構の整理作業は①原図の点検・合成、②第2原図の作成、③トレース、④遺構・写真図版作成の順に進め、これらと並行して各種の⑤計測、⑥鑑定・分析、⑦原稿の執筆を行い報告書に掲載している。

### (2) 遺構図版

各遺構図版は次の縮尺を原則とし、図面にスケールと縮尺率を付している。R B 振立柱建物跡は平面・断面1/100、R D 土坑は平面・断面1/50、R G 溝跡は平面1/250・断面1/50、R Z 溝状遺構平面1/250・断面不定等である。図版中の方位は座標北(基準点1の真北方向角は0度15分55秒西偏)を示している。

### (3) 遺物図版

土器の残存率は口縁上端部の表現で區別し、器面調整は中軸線の両側の半分を図化している。遺物図版の縮尺率は石製品・鉄製品・銅貨が1/2、土器・拓影が1/3である。土器はP、石はSで図示し、土器の調整技法の表現は凡例に示すとおりである。



第8図 凡例

## IV 検出された遺構と遺物

### 1. 概要

今回の調査で検出された遺構は中世の溝跡1条をはじめとし、近世の掘立柱建物跡3棟・門跡1基・溝跡1条・柱穴状土坑145基、近世～近代の土坑7基、時期が不明な土坑31基、溝状遺構34条である。

主な遺物は弥生時代の土器・石器、平安時代の土師器・かわらけ、中世の陶器・かわらけ、近世の陶磁器、鉄製品、錢貨、煙管、フイゴの羽口等である。縄文時代に属する土器の出土はなく、僅かに石器の剥片が見られる。

### 2. 掘立柱建物跡

#### R B01掘立柱建物跡（第9図、写真図版2・4・24）

＜位置・重複関係＞ 調査区南側のC 2区に位置している。東側でR B02掘立柱建物跡と一部重複しているが、柱穴の切り合いが無く新旧関係は不明である。検出はⅢ層中位～下位で確認している。

＜規模・方向＞ 規模は桁行2間(4.20m)、梁行1間(3.00m)の北北東～南南西棟の建物跡である。棟方向は北に対して20度30分東偏している。

＜身舎＞ 桁行柱間寸法は、西北西側のA 1柱～A 3柱が2.00m+2.20m、東南東側のB 1柱～B 3柱が2.20m+2.00mである。梁行柱間寸法は、A 1柱～B 1柱とA 3柱～B 3柱が3.00mを測る。

＜掘り方・柱旗＞ 柱穴の掘り方平面形は、楕円形、円形、台形、不定形等がある。規模は径21～116cm

柱穴No.	A 1柱	A 2柱	A 3柱	B 1柱	B 2柱	B 3柱
直径cm	116×65	62×27	22×21	87×62	66×56	66×56
深さcm	85	19	9	33	32	22

の範囲にあり、深さが9～85cmである。

柱痕はB 1・B 2柱で検

出され径20cm前後を測る。柱穴埋土は暗褐色～褐色を主体とする砂土で、微量の炭を含んでいる。

＜遺物・時期＞ A 1柱の礎石直上から手捏ねの蓋と器破片が出土している。1は3分の1が現存する蓋である。推定径は4.1cm、厚さが1.5cm前後の円盤状を呈し、摘み部を欠損している。2は器で口径が7.2cm、器高が5.1cm、体部上半部に細いヘラ状の痕跡が見られる。時期は柱間尺等から近世に属すると思われる。

#### R B02掘立柱建物跡（第9図、写真図版3・4・24）

＜位置・重複関係＞ 調査区南側のC 2区に位置し、東側はRG01溝跡、西側がRB01掘立柱建物跡と重複している。新旧関係はRB01掘立柱建物跡とは不明であるが、溝跡を切っている事から(新)RB01・02掘立柱建物跡→(旧)RG01溝跡である。検出はⅢ層中位～下位にかけて確認している。

＜規模・方向＞ 規模は桁行4間(8.10～8.20m)、梁行1間(4.10～4.40m)の礎石を使用した建物跡であ

柱穴No.	A 1柱	A 2柱	A 3柱	A 4柱	A 5柱	B 1柱
直径cm	57×57	46×43	103×50	65×50	85×85	65×55
深さcm	50	52	35	27	26	35
柱穴No.	B 2柱	B 3柱	B 4柱	B 5柱	C 1柱	
直径cm	81×81	102×71	71×55	103×55	77×69	
深さcm	38	46	23	47	56	

る。棟方向は東南東～西北を示し、北に対して62度30分西偏している。

＜身舎＞ 桁行柱間寸法は、南南西側のA 1柱～A 5柱が2.10m+2.00m+1.90m+2.10m、北

北東側のB 1柱～B 5柱が2.20m+1.90m+1.90m+2.20mを測る。梁行柱間寸法は、A 1柱～B 1柱が4.40m、A 5柱～B 5柱が4.10mである。

＜掘り方・柱痕＞ 柱穴の掘り方規模は径43～103cmの範囲にあり、深さが26～56cmである。平面形は円形、方形、橢円形、長方形、不定形、瓢箪形がある。柱痕は径20～30cm前後を測る。礎石は径25～40cm、厚さ4～8cm前後の粘板岩を使用し、縁辺部の一部を丁寧に打ち欠き成形している。

＜遺物・時期＞ B 2柱穴埋土から3の撞り鉢(瀬戸産)破片が出土している。他に出土遺物は無いが、時期は柱間尺と遺物から近世に属する。

#### R B03掘立柱建物跡（第10図、写真図版4～6・24）

＜位置・重複関係＞ 調査区南端部のC 2区東寄りに位置し、他遺構との重複はない。検出面はⅢ層上面のにぶい黄褐色砂土中である。

＜規模・方向＞ 規模は遺構南側が調査区域外に延びる事から、全容が不明である。検出された桁行は6間(12.90m)、梁行が4間(6.00m)である。また、梁行は南側の調査区域外にまだ数間延びると思われる。北西側に底のある南東～北西棟の建物跡で、棟方向は北に対して55度西偏している。

＜身舎＞ 桁行柱間寸法は、北東側のA 2柱～A 8柱が1.90m+1.95m+2.00m+2.00m+2.15m+2.90mである。梁行柱間寸法は、A 4柱～E 4柱が0.90m+1.65m+1.75m+1.70m、A 7柱～D 7柱が0.92m+1.74m+1.74mを測る。

＜掘り方・柱痕＞ 柱穴の掘り方平面形は、円形、橢円形、方形、台形、不定形等があり、円形を呈すものが約半数を占めている。規模は径23～83cmで、深さが7～69cm、柱痕は径16～25cm前後である。

柱穴No.	A 2柱	A 3柱	A 4柱	A 5柱	A 6柱	A 7柱	A 8柱	B 4柱	B 5柱
直徑cm	56×49	47×45	61×55	60×50	37×[23]	72×69	39×36	58×50	72×56
深さcm	69	21	39	36	7	41	18	28	44
柱穴No.	B 6柱	B 7柱	B 8柱	C 1柱	C 2柱	C 3柱	C 4柱	C 6柱	C 7柱
直徑cm	26×20	76×52	50×44	72×62	70×66	45×45	83×67	35×32	64×62
深さcm	21	45	—	50	56	37	31	26	24
柱穴No.	D 4柱	D 5柱	D 6柱	D 7柱	E 4柱	F 1柱	F 2柱	〔 〕は現存値 —は不明	
直徑cm	46×45	40×38	40×41	48×49	60×55	39×39	70×60		
深さcm	17	77	38	18	46	32	45		

＜遺物・時期＞ 4はF 2柱埋土中から出土した常滑産の陶器破片である。5は器種不明の土製品で、中央部に径2mm前後の穿孔を施している。時期は柱間尺と遺物から近世に属すると思われる。

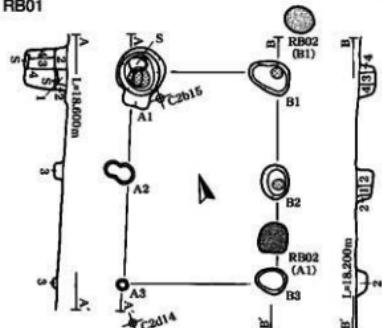
### 3. 門跡

#### R Z門跡（第11図、写真図版7）

＜位置・形式＞ 調査区南側のB 2からC 2区に亘って位置している。親柱のB 3柱・B 4柱の前後に2本ずつ柱を配置した四脚門と思われる。

＜規模・掘り方＞ 試掘トレンチや削平が著しい事から、南側のC 3柱・C 4柱は礎石が、北側のA 3柱・A 4柱が最下部を確かに現存すだけである。柱間寸法はA 3柱～C 3柱が1.53m+1.60m、A 4柱～C 4

## RB01

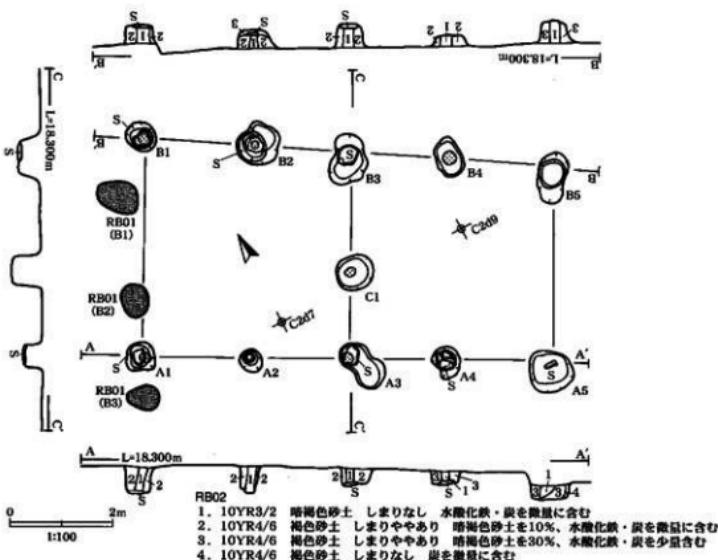


## RB01

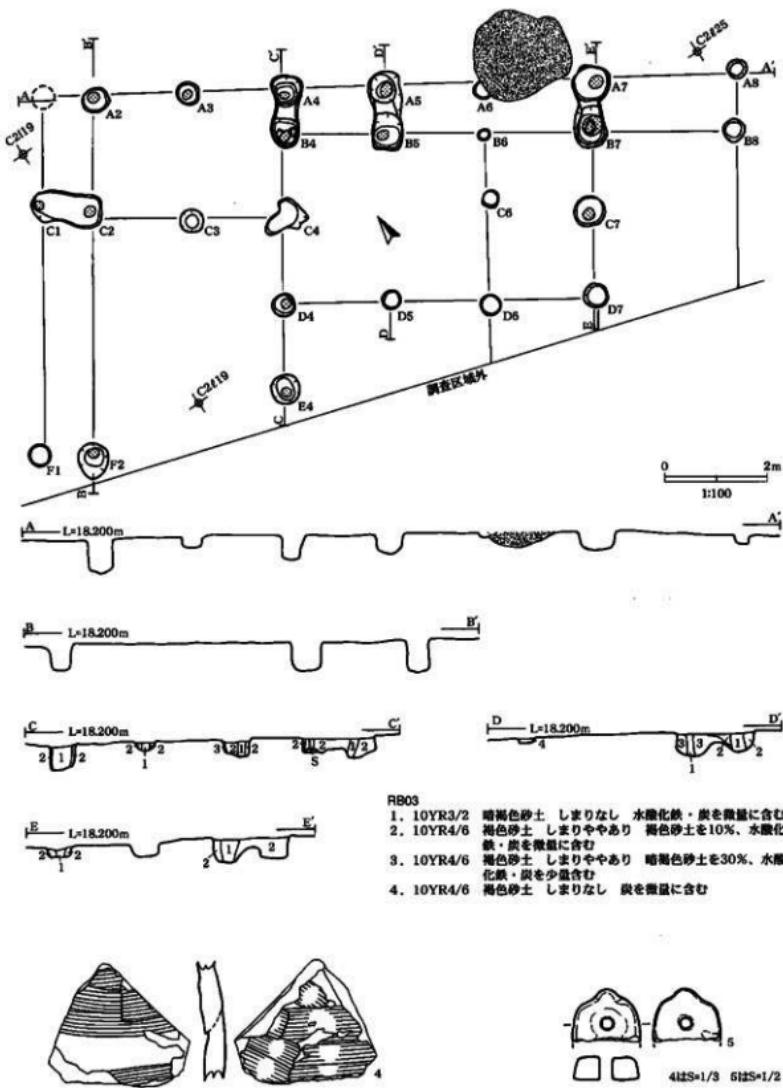
1. 10YR3/1 黒褐色砂土 しまりなし 水酸化鉄・炭を少量含む（柱穴底）
2. 10YR3/3 黒褐色砂土 しまり少しあり 黒褐色砂土を10%、水酸化鉄、炭を少含む
3. 10YR3/2 黒褐色砂土 しまりなし 炭化物を微量に含む
4. 10YR4/6 褐色砂土 しまり少しあり 炭を少量含む



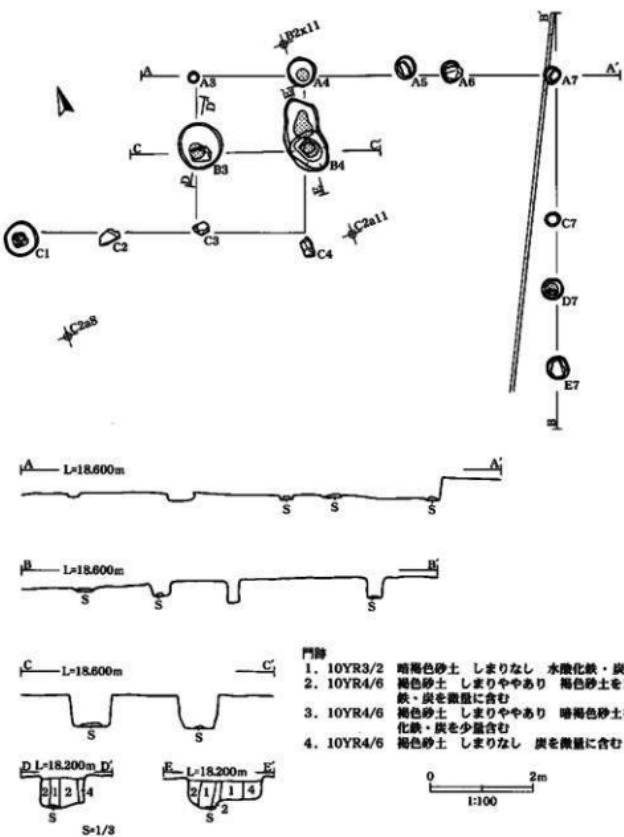
## RB02



第9図 RB01・02掘立柱建物跡・出土遺物



第10図 RB03振立柱建物跡・出土遺物



第11図 RZ門跡

柱が1.50m+1.90mを測る。柱穴の掘り方規模は径20~151cmの範囲にあり、深さは9~60cmである。

〈遺物・時期〉 遺物の出土がなく時期は不明であるが、RB02・03掘立柱建物跡の棟方向と同じである事から近世に属すると思われる。

門跡とそれに伴う柱穴列の規格一覧は次の通りである。

柱穴No.	A 3 柱	A 4 柱	A 5 柱	A 6 柱	A 7 柱	B 3 柱
直径cm	21×20	56×54	43×40	42×42	34×34	90×86
深さcm	9	16	10	5	40	60
柱穴No.	B 4 柱	C 1 柱	C 7 柱	D 7 柱	E 7 柱	
直径cm	151×74	69×65	30×26	43×41	49×44	
深さcm	55	8	45	26	6	

#### 4. 土坑

土坑（第12～17図、写真図版8～17・24） 調査区中央部のB2区から集中して38基検出している。平面形は円形19基、橢円形15基、方形1基、長方形1基、不整形1基、瓢箪形1基があり、円形を基調とするものが半分を占めている。開口部の規模は長径が60cm～1.70m、短径が58cm～1.58mの範囲にあり、深さが8cm～1.28mである。38基の土坑の位置、平面形、規模については土坑観察1～13にまとめて掲載している。

R D03・04・18・27・28・30・32・33・39・42土坑から磁器破片、釘、鉄製品、鉄滓等の遺物が出土している。8はRD18土坑から出土した磁器の茶碗口縁部破片、6・7・9～15は角釘、17は丸釘で大部分が端部ないし先端部を欠損している。16はRD39土坑出土の器種不明の鉄製品である。他に細片のために図面を掲載しなかったが、RD03・04・18・28土坑から鉄滓破片を出土している。

時期は埋土状況や主な出土遺物から近世～近代に属すると思われるが、約7割には出土遺物がなく不明である。

第2表 RD土坑出土鉄製品一覧

No.	登録No.	遺構名	出土層位	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考	図版	写真
6	102A	RD18	埋土中位	釘	[4.5]	1.0	0.8	6.7	端部を欠損	17	24
7	102B	#	埋土中位	釘	[4.2]	1.0	0.6	4.2	先端部欠損	17	24
9	101	RD27	埋土中位	釘	[8.2]	1.4	0.6	12.9	先端部欠損	17	24
10	91	RD28	埋土中位	釘	[4.8]	1.2	0.6	2.4	先端部欠損	17	24
11	92	RD30	埋土中位	釘	[4.5]	1.3	0.7	9.2	両端部欠損	17	24
12	93	RD33	埋土中位	釘	[5.4]	5.7	0.8	14.4	先端部欠損	17	24
13	94A	RD39	埋土中位	釘	[4.2]	0.8	0.6	2.2	端部を欠損	17	24
14	94B	#	埋土中位	釘	[3.1]	0.8	0.4	1.4	両端部欠損	17	24
15	95	#	埋土下部	釘	[4.2]	0.7	0.5	3.7	端部を欠損	17	24
16	96	#	埋土下部	不明	3.1	1.9	1.0	10.4		17	24
17	97	RD42	埋土中位	釘	[8.2]	1.3	0.4	7.2	先端部欠損	17	24

[ ]は現存値

#### 5. 溝跡

R G01溝跡（第18図、写真図版18・24・25）

＜位置・重複関係＞ 調査区南側のB2～C2区に亘って位置し、検出はⅢ層下位で黒褐色土の広がりによって確認している。近世のRB02掘立柱建物跡と重複しており、本遺構が切られている事から新旧関係は（新）RB02掘立柱建物跡→（旧）RG01溝跡である。

＜規模・方向＞ 北東と南西側は調査区域外に及び、遺構の南半部は近世における宅地の石垣構築時による搅乱が著しい事から規模の全容が不明である。調査区内では長さ24.20mを検出し、上幅が1.80～3.70m、下幅が50～70cm、深さが75～98cm前後を測る。

＜埋土＞ 埋土は黒褐～暗褐色砂土を主体とする6層に大別される。上層は炭を含んだ締まりのある黒褐色砂土である。中位はブロック状の褐色土と炭を含む暗褐色砂土で構成され、一部で径10～20cmの大礫の堆積が見られる。下層は褐色～暗褐色砂土の互層で、微量の炭と水酸化鉄を含んでいる。埋土の様相から自然堆積と思われる。

土坑觀察1

遺構名	R D01土坑	遺構名	R D02土坑	遺構名	R D03土坑
図版	12	図版	12	図版	12
写真図版	8	写真図版	8	写真図版	9
位置	B2v4	位置	B2y3～B2y4	位置	C2a4～C2a5
重複関係	なし	重複関係	なし	重複関係	なし
平面形	橢円形?	平面形	橢円形	平面形	円形
規	開口部径cm 102×[56]	規	開口部径cm 140×111	規	開口部径cm 113×117
模	底部径cm 83×[48]	模	底部径cm 118×93	模	底部径cm 108×108
深さcm	36	深さcm	22	深さcm	8
埋土	褐色と黒褐色砂土の2層に大別される 灰を少量含む 自然堆積	埋土	褐色砂土の2層に大別される 炭を含み締まりがある自然堆積	埋土	にぶい黄褐色砂土の単層で構成される 褐色土との混合土で炭を含む 自然堆積
底面	多少起伏が見られ締まっている	底面	ほぼ平坦で締まっている	底面	多少起伏が見られ締まっている
壁	底面から直立して立ち上がる	壁	底面から外傾して立ち上がる	壁	底面から緩やかに立ち上がる
副穴	なし	副穴	なし	副穴	なし
遺物	なし	遺物	なし	遺物	鉄滓
時期	不明	時期	不明	時期	不明

土坑觀察2

遺構名	R D04土坑	遺構名	R D05土坑	遺構名	R D09土坑
図版	12	図版	12	図版	12
写真図版	9	写真図版	9	写真図版	9
位置	C2d4～C2e5	位置	C2b6～C2c6	位置	B2n8～B2n9
重複関係	なし	重複関係	なし	重複関係	なし
平面形	橢円形	平面形	橢円形	平面形	橢円形
規	開口部径cm 116×99	規	開口部径cm 121×112	規	開口部径cm 131×116
模	底部径cm 96×65	模	底部径cm 98×95	模	底部径cm 124×107
深さcm	40	深さcm	11	深さcm	15
埋土	にぶい黄褐色土主体の2層に大別される 上層は炭と焼土粒を含む 自然堆積	埋土	暗褐色砂土の単層で構成される 褐色土との混合土で炭を少量含み締まる	埋土	締まりのある暗褐色砂土の単層で構成される 炭を少量含む 自然堆積
底面	多少起伏が見られ締まっている	底面	凸凹があり締まっている	底面	ほぼ平坦で締まっている
壁	底面から外傾して立ち上がる	壁	底面から緩やかに外傾して立ち上がる	壁	底面から外傾して立ち上がる
副穴	なし	副穴	なし	副穴	なし
遺物	鉄滓	遺物	なし	遺物	なし
時期	不明	時期	不明	時期	不明

土坑観察3

遺構名		R D10土坑	遺構名	R D11土坑	遺構名	R D12土坑
図版	12	図版	13	図版	13	
写真図版	10	写真図版	10	写真図版	10	
位置	B2p9	位置	B2p9	位置	B2p9～B2q9	
重複関係	なし	重複関係	なし	重複関係	なし	
平面形	円形	平面形	円形	平面形	円形	
規	開口部径cm 113×109	規	開口部径cm 81×74	規	開口部径cm 60×55	
底	部 径cm 96×90	底 部 径cm 53×52	底 部 径cm 44×43			
模	深さcm 43	模	深さcm 40	模	深さcm 22	
埋土	にぶい黄褐色砂土と炭を含む暗褐色砂土の単層で構成される自然堆積	埋土	上層は締まりのある黒褐色砂土 下層は炭と黒褐色土を含むにぶい黄褐色砂土	埋土	暗褐色土の単層で構成される炭を少量含む 自然堆積	
底面	ほぼ平坦で締まっている	底面	ほぼ平坦で締まっている	底面	凸凹があり締まっている	
壁	底面から外傾して立ち上がる	壁	底面から外傾して立ち上がる	壁	底面から外傾して立ち上がる	
副穴	なし	副穴	なし	副穴	なし	
遺物	なし	遺物	なし	遺物	なし	
時期	不明	時期	不明	時期	不明	

土坑観察4

遺構名		R D13土坑	遺構名	R D14土坑	遺構名	R D15土坑
図版	13	図版	13	図版	13	
写真図版	10	写真図版	11	写真図版	11	
位置	B2q8	位置	B2q8	位置	B2r7	
重複関係	なし	重複関係	なし	重複関係	なし	
平面形	円形	平面形	円形	平面形	梢円形	
規	開口部径cm 113×112	規	開口部径cm 60×60	規	開口部径cm 123×112	
底	部 径cm 106×112	底 部 径cm 52×50	底 部 径cm 98×91			
模	深さcm 25	模	深さcm 27	模	深さcm 58	
埋土	にぶい黄褐色砂土の単層で構成される 黒褐色土との混合土で炭を少量含む	埋土	黒褐色砂土の単層で構成される 黃褐色砂土と炭を少量含む 自然堆積	埋土	暗褐色と黒褐色砂土の2層に大別される 上層はにぶい黄褐色砂土を含む	
底面	ほぼ平坦で締まっている	底面	ほぼ平坦で締まっている	底面	ほぼ平坦で締まっている	
壁	底面から直立して立ち上がる	壁	底面から直立して立ち上がる	壁	底面から直立して立ち上がる	
副穴	なし	副穴	なし	副穴	なし	
遺物	なし	遺物	なし	遺物	なし	
時期	不明	時期	不明	時期	不明	

## 土坑観察 5

遺構名	R D16土坑	遺構名	R D17土坑	遺構名	R D18土坑
図版	13	図版	13	図版	14・17
写真図版	11	写真図版	11	写真図版	12・24
位置	B2s6～B2s7	位置	B2p11	位置	B2r10～B2s10
重複関係	なし	重複関係	なし	重複関係	なし
平面形	横円形	平面形	円形	平面形	円形
規	開口部径cm 116×111	規	開口部径cm 66×63	規	開口部径cm 140×136
底	底部径cm 106×100	底	底部径cm 56×54	底	底部径cm 126×126
模	深さcm 39	模	深さcm 21	模	深さcm 53
埋土	暗褐色砂土の単層で構成される にぶい黄褐色砂土と炭を含む 少量含む 自然堆積	埋土	締まりのない暗褐色砂土の単層で構成される 自然堆積	埋土	暗褐色と黒褐色砂土は2層に 大別される 締まりはなく炭 を少量含む 自然堆積
底面	凸凹があり締まっている	底面	多少起伏が見られ締まっている	底面	ほぼ平坦で締まっている
壁	底面から直立して立ち上がる	壁	底面から外傾して立ち上がる	壁	底面から直立して立ち上がる
副穴	なし	副穴	なし	副穴	なし
遺物	埋土中から土師器破片1点	遺物	なし	遺物	釘、鉄滓、磁器
時期	不明	時期	不明	時期	近世～近代

## 土坑観察 6

遺構名	R D19土坑	遺構名	R D20土坑	遺構名	R D21土坑
図版	14	図版	14	図版	14
写真図版	12	写真図版	12	写真図版	12
位置	B2r11～B2s11	位置	B2r13～B2r14	位置	B2t15～B2u15
重複関係	なし	重複関係	なし	重複関係	なし
平面形	円形	平面形	円形	平面形	円形
規	開口部径cm 95×94	規	開口部径cm 119×107	規	開口部径cm 145×139
底	底部径cm 90×85	底	底部径cm 96×93	底	底部径cm 116×114
模	深さcm 12	模	深さcm 43	模	深さcm 78
埋土	炭を少量含む暗褐色砂土の単層で構成される 自然堆積	埋土	暗褐色土の単層で構成される にぶい黄褐色砂土と炭を含む 自然堆積	埋土	暗褐色砂土を主体とする5層 に大別される 締まりはなく 炭を少量含む
底面	ほぼ平坦で締まっている	底面	ほぼ平坦で締まっている	底面	多少起伏が見られ締まっている
壁	底面から直立して立ち上がる	壁	底面から直立して立ち上がる	壁	底面から外傾して立ち上がる
副穴	なし	副穴	なし	副穴	なし
遺物	なし	遺物	なし	遺物	なし
時期	不明	時期	不明	時期	不明

## 土坑観察7

遺構名	R D22土坑	遺構名	R D23土坑	遺構名	R D25土坑
図版	14	図版	14	図版	14
写真図版	13	写真図版	13	写真図版	13
位置	B2r15	位置	B2r16	位置	B2r25
重複関係	なし	重複関係	なし	重複関係	なし
平面形	橢円形	平面形	円形	平面形	方形
規	開口部径cm 78×58	規	開口部径cm 113×110	規	開口部径cm 84×76
底	部径cm 69×52	底	部径cm 92×90	底	部径cm 78×66
模	深さcm 9	模	深さcm 70	模	深さcm 11
埋土	暗褐色砂土の2層に大別される下層はにぶい黄褐色砂土の混合土である	埋土	締まりのない暗褐色砂土の2層に大別される炭を少量含む自然堆積	埋土	暗褐色砂土と褐色砂土の2層に大別される締まりがあり炭を少量含む
底面	多少起伏が見られ締まっている	底面	多少起伏が見られ締まっている	底面	凸凹があり締まっている
壁	底面から外傾して立ち上がる	壁	底面から直立して立ち上がる	壁	底面から外傾して立ち上がる
副穴	なし	副穴	なし	副穴	なし
遺物	なし	遺物	なし	遺物	なし
時期	不明	時期	不明	時期	不明

## 土坑観察8

遺構名	R D26土坑	遺構名	R D27土坑	遺構名	R D28土坑
図版	15	図版	15・17	図版	15・17
写真図版	13	写真図版	14・24	写真図版	14・28
位置	B2t8～B2u8	位置	B2u12	位置	B2v12
重複関係	RD38を切る	重複関係	なし	重複関係	なし
平面形	不整形	平面形	円形	平面形	円形
規	開口部径cm 150×132	規	開口部径cm 137×133	規	開口部径cm 130×130
底	部径cm 122×84	底	部径cm 119×114	底	部径cm 128×116
模	深さcm 73	模	深さcm 65	模	深さcm 90
埋土	暗褐色砂土を主体とする5層に大別される黒褐色砂土との混合土自然堆積	埋土	暗褐色砂土を主体とする3層に大別される褐色土とにぶい黄褐色土の混合土	埋土	暗褐色砂土の2層に大別される締まりはなく炭と焼土粒を微量に含む
底面	凸凹があり締まっている	底面	多少起伏が見られ締まっている	底面	中央部が高まり締まっている
壁	底面から外傾して立ち上がる	壁	底面から直立して立ち上がる	壁	底面から直立して立ち上がる
副穴	なし	副穴	なし	副穴	なし
遺物	なし	遺物	釘1点	遺物	釘1点、鉄滓
時期	不明	時期	近世～近代	時期	近世～近代

## 土坑観察9

遺構名	R D29土坑	遺構名	R D30土坑	遺構名	R D31土坑
図版	15	図版	16・17	図版	16
写真図版	14	写真図版	14・24	写真図版	15
位置	B2t10～B2t11	位置	B2p12	位置	B2o11
重複関係	RD37に切られる	重複関係	なし	重複関係	RD33・34を切る
平面形	楕円形	平面形	長方形	平面形	楕円形
規	開口部径cm 128×[125]	規	開口部径cm 153×116	規	開口部径cm 122×89
	底部径cm 114×[119]		底部径cm 120×94		底部径cm 102×62
模深さcm	14	模深さcm	41	模深さcm	85
埋土	暗褐色砂土の單層で構成される褐色砂土と炭を少量含む自然堆積	埋土	締まりのない暗褐色砂土の2層に大別される にぶい黄褐色砂土との混合土	埋土	暗褐色砂土を主体とする2層に大別される 炭を微量に含む自然堆積
底面	多少起伏が見られ縮まっている	底面	多少起伏が見られ縮まっている	底面	ほぼ平坦で縮まっている
壁	底面から直立して立ち上がる	壁	底面から外傾して立ち上がる	壁	底面から外傾して立ち上がる
副穴	なし	副穴	なし	副穴	なし
遺物	なし	遺物	釘1点	遺物	なし
時期	不明	時期	近世～近代	時期	不明

## 土坑観察10

遺構名	R D32土坑	遺構名	R D33土坑	遺構名	R D34土坑
図版	16	図版	16・17	図版	16
写真図版	15	写真図版	15・24	写真図版	15
位置	B2w15～B2w16	位置	B2o10～B2o11	位置	B2o11～B2p11
重複関係	なし	重複関係	RD31に切られる	重複関係	RD31に切られる
平面形	円形	平面形	楕円形	平面形	楕円形？
規	開口部径cm 130×123	規	開口部径cm 165×[158]	規	開口部径cm 140×[130]
	底部径cm 116×110		底部径cm 138×116		底部径cm 115×[105]
模深さcm	31	模深さcm	88	模深さcm	56
埋土	暗褐色砂土を主体とする2層に大別される 褐色砂土との混合土 自然堆積	埋土	暗褐色砂土を主体とする2層に大別される にぶい黄褐色と褐色砂土の混合土	埋土	締まりのない暗褐色砂土で構成されている にぶい黄褐色土との混合土
底面	ほぼ平坦で縮まっている	底面	多少起伏が見られ縮まっている	底面	多少起伏が見られ縮まっている
壁	底面から直立して立ち上がる	壁	底面から直立して立ち上がる	壁	底面から外傾して立ち上がる
副穴	なし	副穴	なし	副穴	なし
遺物	器種不明な鉄製品1点	遺物	釘1点	遺物	なし
時期	不明	時期	近世～近代	時期	不明

土坑観察11

造構名	R D35土坑	造構名	R D36土坑	造構名	R D37土坑
図版	16	図版	16	図版	15
写真図版	16	写真図版	16	写真図版	16
位置	B2t13	位置	B2t13~B2t14	位置	B2s10~B2s11
重複関係	RD36に切られる	重複関係	RD35を切る	重複関係	RD29を切る
平面形	楕円形	平面形	楕円形	平面形	円形
規	開口部径cm 136×[85]	規	開口部径cm [170]×138	規	開口部径cm 120×114
底	底部径cm 124×[80]	底	底部径cm 120×118	底	底部径cm 113×107
模	深さcm 105	模	深さcm 110	模	深さcm 62
埋	暗褐色砂質土を主体とする5層に大別される 炭や炭化物を微量に含む	埋	少し縮まりのある暗褐色砂土を主体とする4層に大別される 自然堆積	埋	暗褐色砂土の単層で構成される にぶい黄褐色砂土と炭を含む 自然堆積
底	中央部が高まり締まっている	底	ほぼ平坦で締まっている	底	ほぼ平坦で締まっている
壁	底面から直立して立ち上がる	壁	底面から外傾して立ち上がる	壁	底面から直立して立ち上がる
副穴	なし	副穴	なし	副穴	なし
遺物	なし	遺物	なし	遺物	なし
時期	不明	時期	不明	時期	不明

土坑観察12

造構名	R D38土坑	造構名	R D39土坑	造構名	R D40土坑
図版	15	図版	17	図版	17
写真図版	16	写真図版	17・24	写真図版	17
位置	B2t8	位置	B2g2	位置	B2j9~B2j10
重複関係	RD26に切られる	重複関係	なし	重複関係	なし
平面形	楕円形	平面形	円形	平面形	瓢箪形
規	開口部径cm 108×[56]	規	開口部径cm 147×130	規	開口部径cm 184×122
底	底部径cm 79×[38]	底	底部径cm 103×97	底	底部径cm 166×106
模	深さcm 36	模	深さcm 128	模	深さcm 47
埋	少し縮まりのある暗褐色砂土の単層である 炭を微量に含む 自然堆積	埋	黒褐色砂土の単層である 締まりがあり炭を少量含む 自然堆積	埋	黒褐色砂土とにぶい黄褐色砂土の2層に大別される 炭を微量に含む 自然堆積
底	ほぼ平坦で締まっている	底	ほぼ平坦で締まっている	底	凸凹があり締まっている
壁	底面から外傾して立ち上がる	壁	底面から直立して立ち上がる	壁	底面から緩やかに外傾して立ち上がる
副穴	なし	副穴	径39×37cm、深さ27cm	副穴	なし
遺物	なし	遺物	釘3点、鉄滓	遺物	なし
時期	不明	時期	近世~近代	時期	不明

## 土坑観察13

遺構名		R D41土坑	遺構名		R D42土坑
図版	17		図版	17	
写真図版	17		写真図版	17・24	
位置	Aly21~Aly22		位置	A2y6	
重複関係	なし		重複関係	なし	
平面形	円形		平面形	円形	
規模	開口部径cm 底部径cm 深さcm	117×114 96×93 77	規模	開口部径cm 底部径cm 深さcm	121×119 98×93 120
埋土	綿まりのある黒褐色砂土の単層である にぶい黄褐色土と 炭を少量含む		埋土	黒褐色砂土の単層で構成され ている やや綿まり炭を少量 含む 自然堆積	
底面	ほぼ平坦で綿まっている		底面	多少起伏が見られ綿まっている	
壁	底面から直立して立ち上がる		壁	底面から直立して立ち上がる	
副穴	径38×33cm、深さ13cm		副穴	径38×36cm、深さ24cm	
遺物	なし		遺物	釘1点	
時期	不明		時期	近世~現代	

〈壁・底面〉 壁は薬研状に掘られ、底面から緩やかに外傾して立ち上がっている。上半部は搅乱と削平を受けしており、北側は一部で砂層が露出する事から崩落が著しい。底面は多少起伏が見られるものの平坦で、堅く綿まっている。

〈遺物・時期〉 遺物は埋土上位~下部にかけて、瓦器、陶器、鉄製品、鉄滓、フイゴの羽口等が出土している。19・20はかわらけである。19は口径8cm、器高2cmの小型の器形で、底部が丸底を呈している。口クロ痕は明瞭で、胎土も緻密である。20の口唇部はやや角張り、体部下半に指ナデ調整を施している。

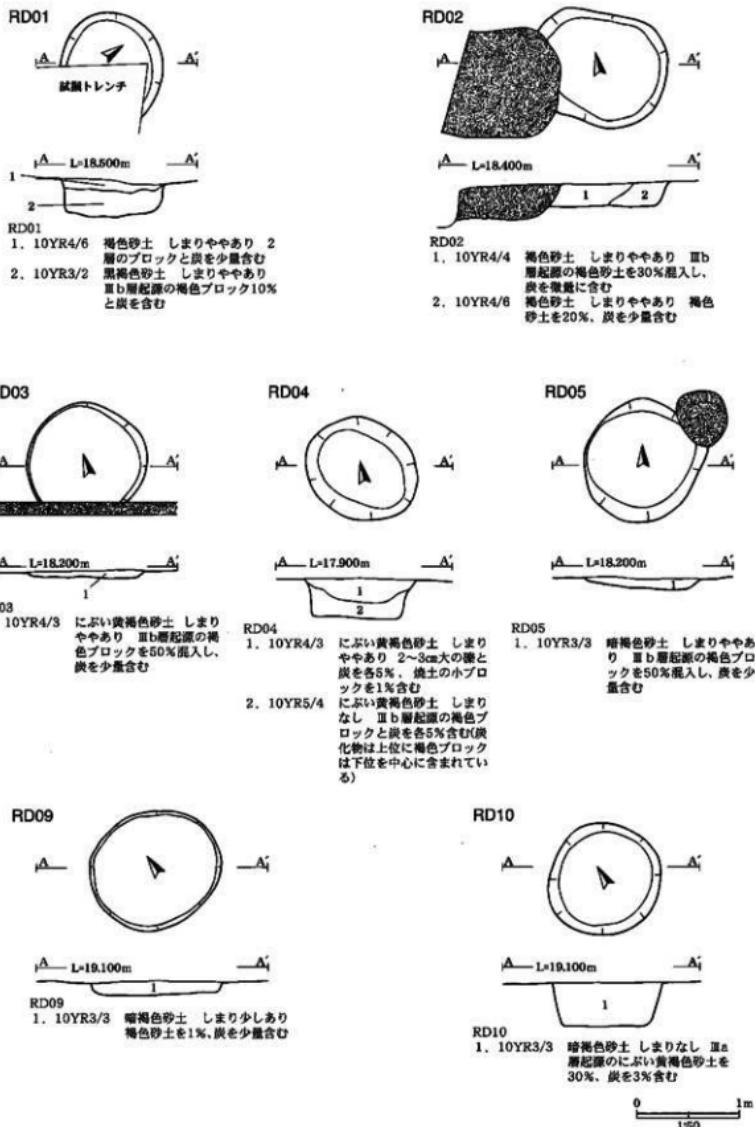
18・23は陶器の腹体部破片で、18が常滑産である。21・22は瓦器の破片で、22の底部は角高台である。

鉄製品は25~31である。25~27は角釘で、いずれも両端ないし端部を欠損している。28は長さ5.2cmの楔と思われる破片、29は長さ6.8cm、重さ162gの器種不明の鉄塊である。30は小型の刀子で、刃部の先端を欠

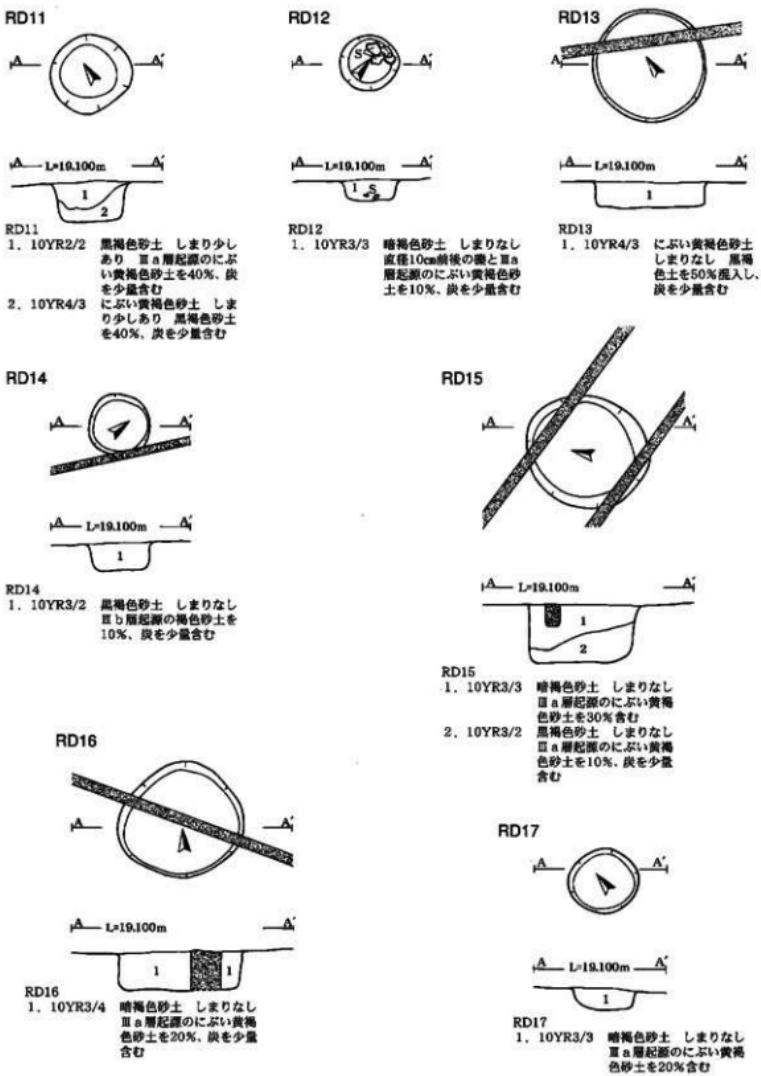
第3表 溝跡出土鉄製品一覧

No.	登録No.	遺構名	出土層位	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考	図版	写真
25	114	RG01	埋土上位	釘	[3.9]	1.0	0.7	4.1	両端部欠損	18	24
26	100	RG01	埋土上位	釘	[2.7]	1.7	0.6	2.6	端部を欠損	18	24
27	104	RG01	埋土下位	釘	[5.8]	0.8	0.5	2.6	両端部欠損	18	24
28	99	RG01	埋土上位	楔?	[5.2]	1.8	0.5	17.2		18	24
29	103	RG01	埋土下位	不明	6.8	4.2	2.1	162.0		18	24
30	98	RG01	埋土上位	刀子	[5.8]	1.5	0.5	4.3	刃部一部欠損	18	25
31	105	RG01	埋土下位	不明	[2.4]	1.3	1.1	3.5		18	25

〔 〕は現存値

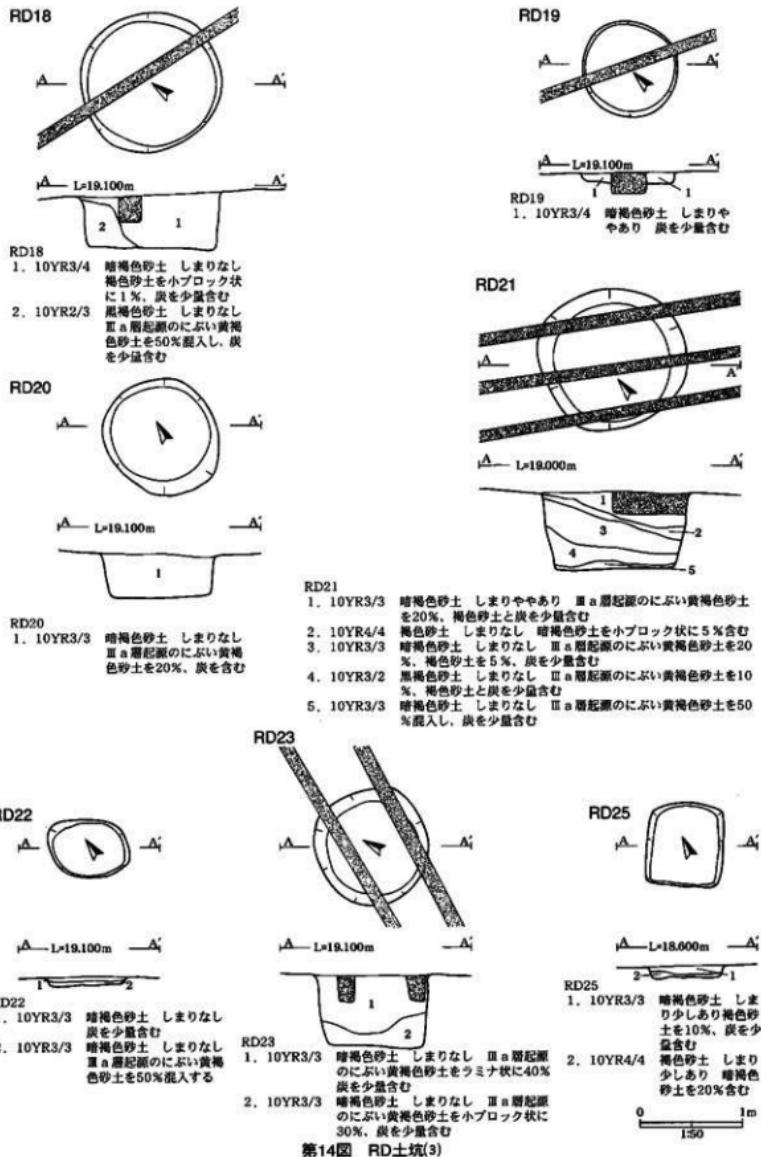


第12図 RD土坑(1)

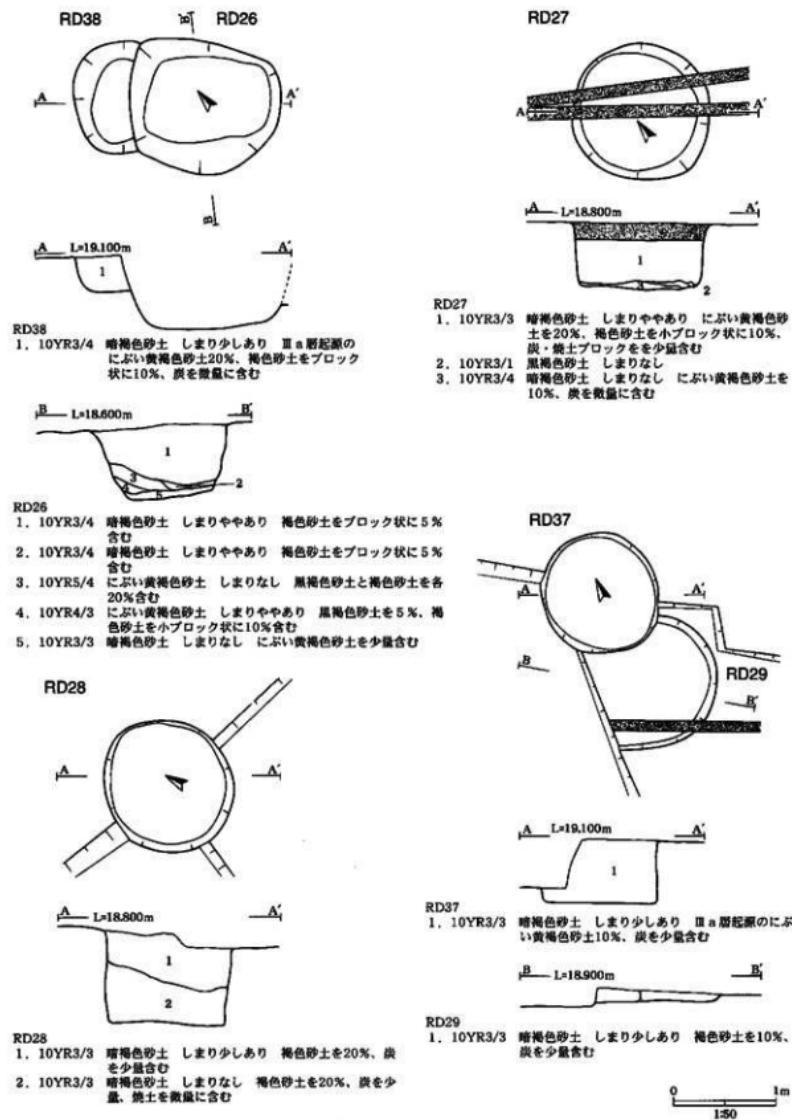


0 1m  
1:50

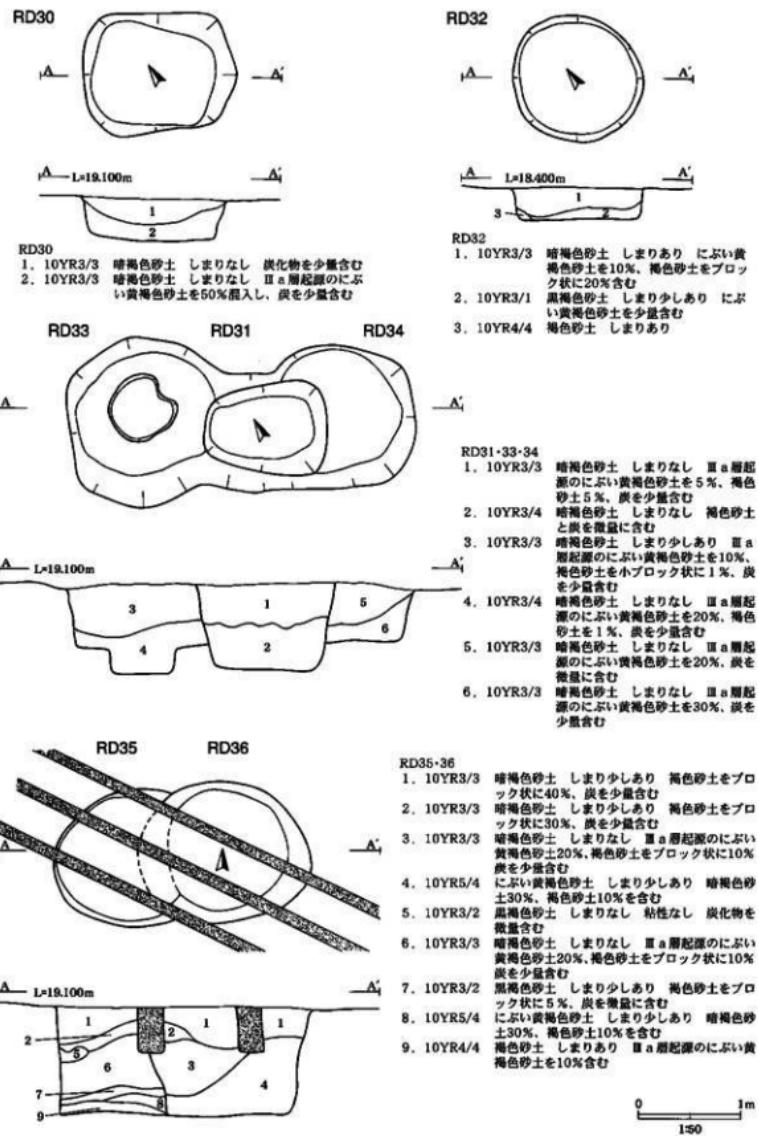
第13図 RD土坑(2)



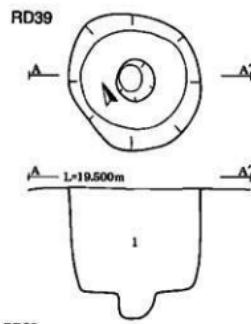
第14図 RD土坑(3)



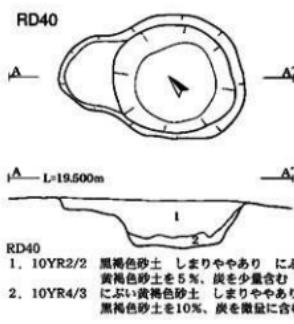
第15図 RD土坑(4)



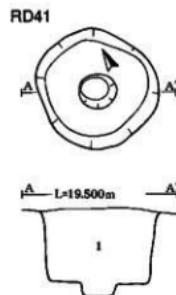
第16図 RD土坑(5)



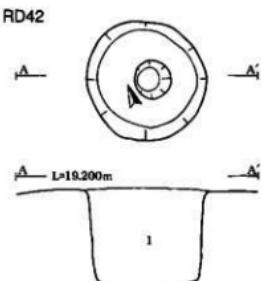
RD39  
1. 10YR3/2 黒褐色砂土 しまりややあり にぶい  
黄褐色砂土を10%、炭を少量含む



RD40  
1. 10YR2/2 黒褐色砂土 しまりややあり にぶい  
黄褐色砂土を5%、炭を少量含む  
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂土 しまりややあり  
黒褐色砂土を10%、炭を微量に含む

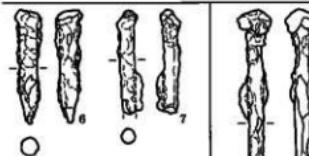


RD41  
1. 10YR2/3 黑褐色砂土 しまりややあり  
にぶい黄褐色砂土を1%、炭を  
少量含む

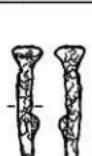


RD42  
1. 10YR3/2 黑褐色砂土 しまりややあり にぶい  
黄褐色砂土と炭を少量含む

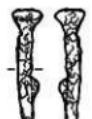
0 1m  
1:50



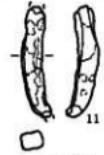
RD18



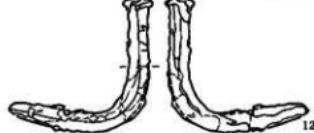
RD27



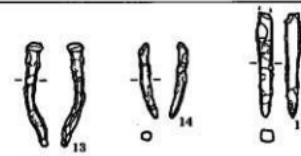
RD28



RD30



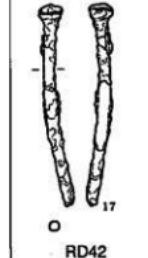
RD33



RD42

SはS=1/3  
他のS=1/2

RD39



第17図 RD土坑(6)・出土遺物

損している。31は細片のため器種が不明である。また、埋土上～中位で鉄滓2点とフイゴの羽口2点を出土しているが、破片のため図面の掲載を割りあいしている。時期は遺物から中世～近世と思われる。

#### R G02溝跡（第18図、写真図版18）

＜位置・重複関係＞ 調査区中央部東南東寄りのB 2～B 3区に亘って位置し、検出はⅢ層中位で褐色土の広がりで確認している。遺構の西側は、近代の擾乱土坑と重複し切られている。

＜規模・方向＞ 規模は一部土坑と重複する事から詳細が不明である。確認された長さは北西～南東方向に5.70m、最大上幅が1.20m、下幅が76cm、深さ34cm前後を測る。

＜埋土＞ 埋土は2層に大別される。1層は堅く締まった暗褐色砂土で、小ブロックの炭を含んでいる。2層は水酸化鉄が帯状に堆積し、Ⅲ b層に類似する褐色砂土で構成されている。1・2層の互層で自然堆積の様相を示している。

＜壁・底面＞ 壁は北側が底面から直立気味に立ち上がっており、南側が緩やかに外傾している。底面は堅く締まり、ほぼ平坦である。

＜遺物・時期＞ 遺物の出土がなく、時期は不明である。

## 6. 溝状遺構

溝状遺構は、調査区中央部の南東側で7条、北西側で27条の計34条を検出している。

#### R Z01～07溝状遺構（第19図、写真図版19）

＜位置＞ 調査区中央部の南東側、B 2～C 2区に亘って位置する。検出はⅢ b層上面からⅢ c層中で褐色土の広がりによって確認している。

＜規模・方向＞ 一部試掘トレンチで削平されていることから、規模の全容は不明である。長さは22.30～36.00m、上幅が40～140cm、下幅が30～80cm、深さが4～38cmを測る。各溝の間隔は1.00～1.40m前後で並行している。長軸方向は北東～南西を示す。

＜埋土＞ 埋土はにぶい黄褐色砂土と褐色砂土で構成され、炭を微量に含んでいる。埋土状況は自然堆積の様相を示している。＜壁・底面＞ 壁は砂層中にあるために上部の崩落が著しく、底面から緩やかに外傾して立ち上がるものが大部分を占めている。底面はほぼ平坦で、締まりがなく軟らかい。

＜遺物・時期＞ 出土遺物がないことから、時期は不明である。

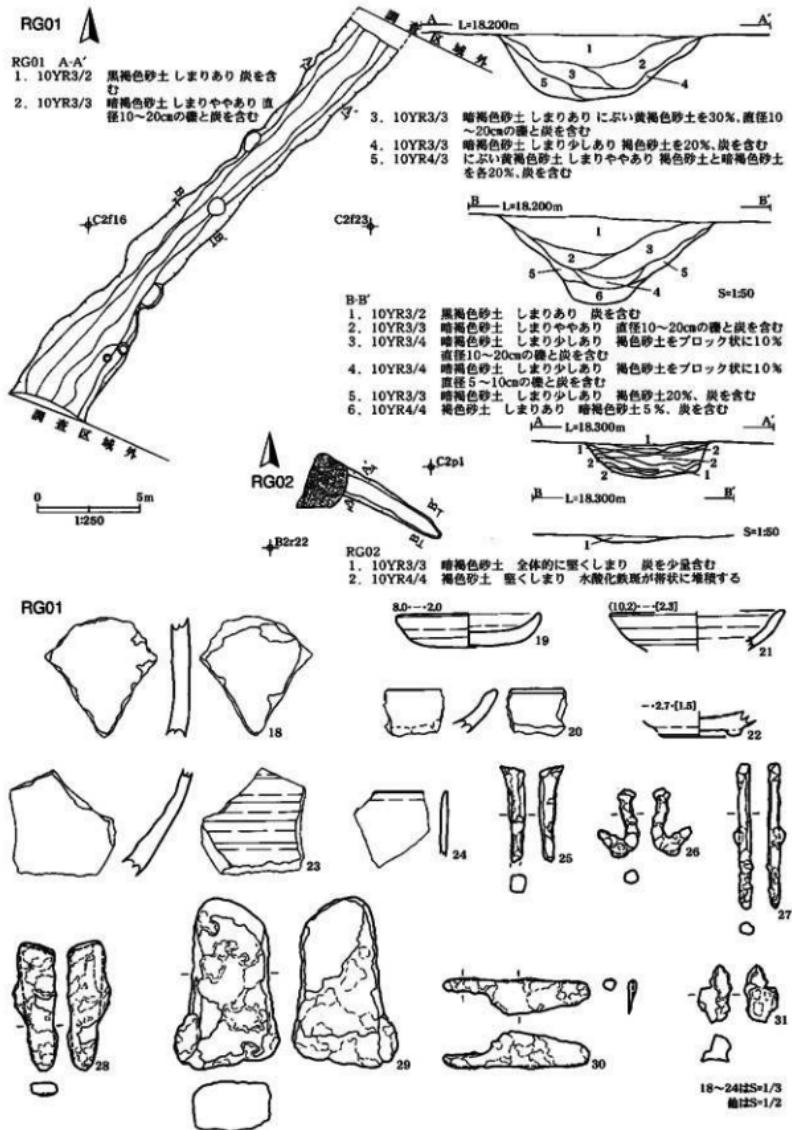
#### R Z08～34溝状遺構（第20図、写真図版20～22・25）

＜位置＞ 調査区北西側のA 2～B 2区に亘って位置している。検出面はⅡ層中位である。

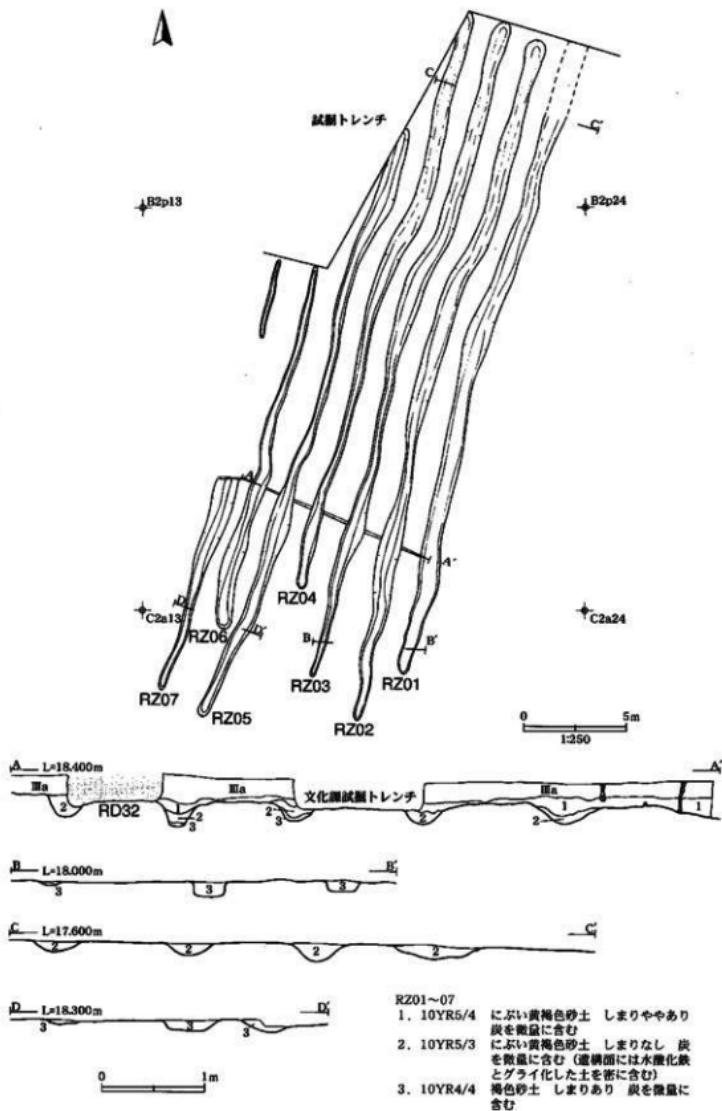
＜規模・方向＞ 規模は長さが6.00～23.00m、上幅が60～110cm、下幅が30～80cm、深さが2～24cmを測る。長軸方向は北東～南西を示し、各溝との間隔は20～80cm前後で並行している。

＜埋土＞ 埋土はR Z01～07溝状遺構と同様のにぶい黄褐色砂土と褐色砂土で構成され、炭を微量に含んでいる。堆積状況は自然堆積の様相を示している。＜壁・底面＞ 壁は一部で崩落が見られ、底面から外傾して立ち上がっている。底面は多少起伏があり、締まりがなく全体に軟らかい。

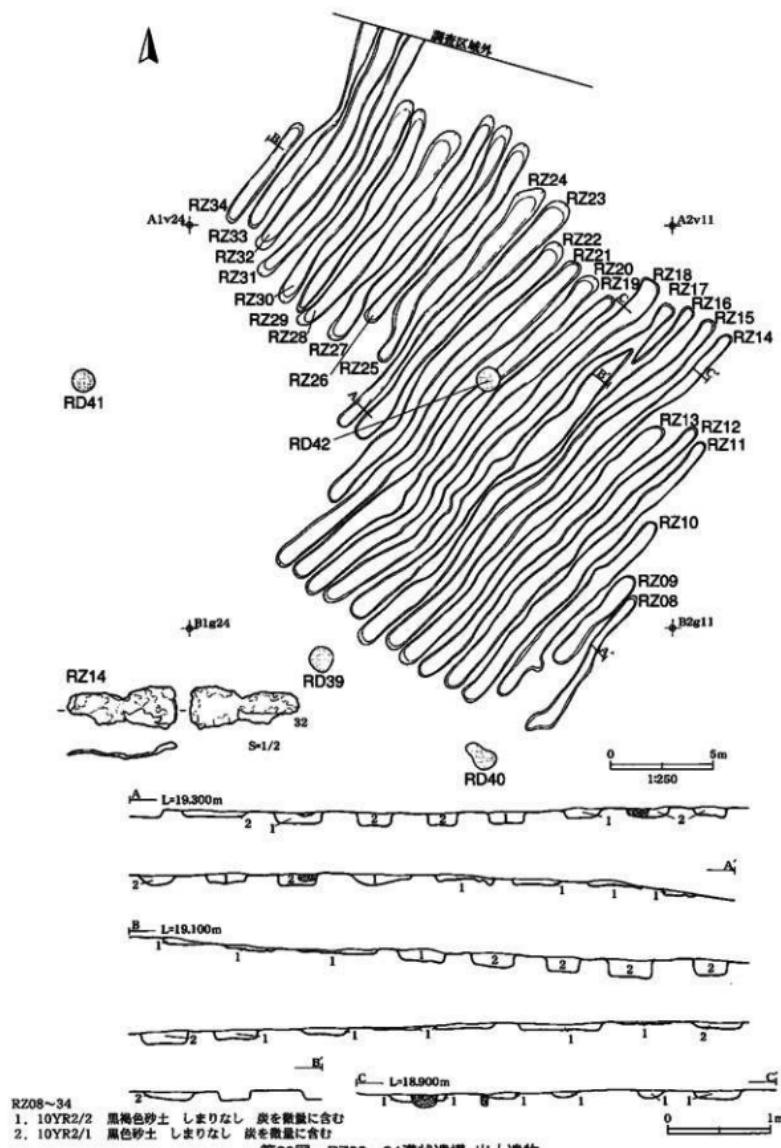
＜遺物・時期＞ 遺物はR Z14溝状遺構埋土下部から、器種不明の鉄製品が1点出土している。32は現存長4.4cm、幅1.8cm、厚さ1mm前後、重さ3.5gを測る。他に出土遺物がなく、時期は不明である。



第18図 RG01-02溝跡・出土遺物



第19図 RZ01～07溝状造構



第20図 RZ08~34溝状遺構・出土遺物

## 7. 柱穴状土坑

柱穴状土坑（第21図、写真図版23・25）調査区南端部のC2区から145基検出している。検出面はⅢ層中位～IV層上面である。平面形は方形2基、不整形13基、楕円形57基、円形73基で、約9割が円形と楕円形を基調としている。長径は12cm～1.24m、短径が12cm～1.09mの範囲にあり、開口部の平均径が42×36cmである。深さは3.5～91.5cmで、削平を受け5cm未溝の浅いものもあるが、平均で24.9cmを測る。

埋土は褐色砂質シルトの単層が大部分を占め、堅く締まり微量の炭を含むものもある。内8基から直径13～20cmの柱痕を確認している。掘り方の埋土は褐色砂質シルトで構成され、堅く締まっている。

遺物はP5柱(33・34)とP55柱(35)から手捏ね、P121柱から36の陶器破片を出土している。33と34は、底面に伏せた状態で出土した手捏ねの蓋と器である。33の蓋は径6.8cm、厚さ1.5cm前後の円盤状を呈している。内面は緩やかな盛みがあり、外側の摘み部分は一部欠損している。

34の器は口径が6.8cm、器高が4.8cm、厚さ1.5cmを測る。底部は丸底で内湾して立ち上がり、口唇部は角ばっている。器面調整は外面上部に横方向の細いヘラ状の調整痕、内面がナデ調整を施している。胎土には石英砂と径1mm以下の砂を含み、全体に脆く焼成は粗雑である。

35は3分の1が現存する手捏ねの蓋と器である。全体の器形は不明であるが蓋の厚さは1.5cmで、器の器高が3.7cmを測る。また、器の体部外面上部には、34と同様のヘラ状の調整痕が見られる。

36は浅皿ないし茶碗と思われる破片で、時期と产地は細片のために不明である。

## 8. 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物（第22～26図、写真図版25～27）遺構外からは土器、陶磁器、石器、鉄製品、錢貨、フイゴの羽口が出土している。土器は弥生時代、平安時代の土師器(壺・甌)・かわらけ、中世のかわらけ、瓦器、磁器等がある。

弥生土器は37～49である。37は鳥形の器形を呈した注口土器で、注ぎ口の一部を欠損している。外面に単節LRの斜縞文を無作為に施している。注口部には浅い一条の沈線が巡り、把手はやや丸味があり持ちやすくなっている。底部は木葉痕で、胎土と焼成も良好である。

38～40は蓋で、小型の器形である。38の体部外面はLRの単節斜縞文が施され、内外面に黒斑が見られる。39は38と比較して器形がひとまわり大きく、焼成は良好で黒斑がある。40は外面の剥落が著しいがLRの単節斜縞文を施している。焼成は他に比較してやや粗雑である。

41は口縁部の一部を欠損した鉢で、器形全体が歪んでいる。LRの単節斜縞文が施され、体部下半部の一部と底部に粗雑なミガキが見られる。

42は浅鉢の口縁部破片である。山形の口縁には並行する一条の沈線が巡り、沈線で区画した中に単節の斜縞文を施した後に一部を磨り消している。口縁内面にも沈線を施し、薄くではあるが朱の痕跡も見られる。43は浅鉢と思われる体部下半から底部破片である。沈線文と磨り消し縞文で文様を構成している。胎土に石英砂の混入が多く、焼成はやや粗雑である。一部に朱の付着が認められる。

44・45は甌で器形から44が小型、45が大型に属する。44は波状口縁で、並行する一条の沈線が巡る。口縁は頸部から直立気味に立ち上がり、口唇部が平坦である。頸部にはV字形の三条の沈線が並行している。底部は欠損し、体部外面に無筋の斜縞文が施されている。胎土は良好で、内外面の一部に黒斑が見られる。

46は波状口縁で、一条の沈線が巡り山形の頂部に刻みがある。頸部はV字形の沈線が三条並行して巡り、口縁部はやや外反して立ち上がっている。口唇部はほぼ平坦である。体部外面は剥落が一部に見られるが、

単節の斜繩文LRを施している。底部は磨滅しているが木葉痕である。

46は底部を欠損した変で、口縁部は頭部から直立して立ち上がっている。口縁部には横方向に荒い粗雑なナデ調整を施している。体部外面は単節の斜繩文LRで、一部に粘土紐の輪積み痕が見られる。全体に器形の歪みが大きく、胎土に石英砂と金雲母を含んでいる。47は壊ないし鉢と思われる器形で、底部が木葉痕である。体部外面は単節の斜繩文LRを施し、粘土紐の輪積み痕が明瞭である。

48・49は口縁部を欠損した球洞気味の壺である。48は磨滅しているが体部外面下半にミガキ調整、底部に荒いケズリ調整を施している。49の外面も丁寧なミガキ調整である。いずれも胎土に石英砂を含み、焼成は良好である。50は壊ないし鉢と思われる口縁部破片で、口唇部がやや丸味をもっている。

平安時代の土師器は51～55である。51は底部の切り離しが回転糸切りの壺の破片である。52・53・55の坏は、内外面ともロクロ痕以外の調整をもたない所謂赤焼き土器で、底部の切り離しが回転糸切りである。胎土に砂の混入が多く見られる。54は内面を黒色処理を施した坏で、ヘラミガキ調整痕は磨滅しているので不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。56～58はロクロ成形のかわらけの破片で、底部が丸底である。56・58の底部は指ナデ調整が施されている。胎土は緻密で焼成も良好である。

59は中世のかわらけである。浅めの器形で、口縁部は底部から内窓気味に立ち上がっている。ロクロ痕が明瞭で、胎土の焼成も良好である。

60は渥美産の壺の口縁部破片、61が青白磁の茶碗片、62が時期不明の陶器破片である。

63は弥生土器と供伴出土した凹石で、長さ13.2cm、幅6.7cm、厚さ2.9cm、重さ242.5gを測る。片面の2カ所に円錐状の使用痕跡が認められ、瘤みの径は1.2～2.2cm、深さが7mm前後である。

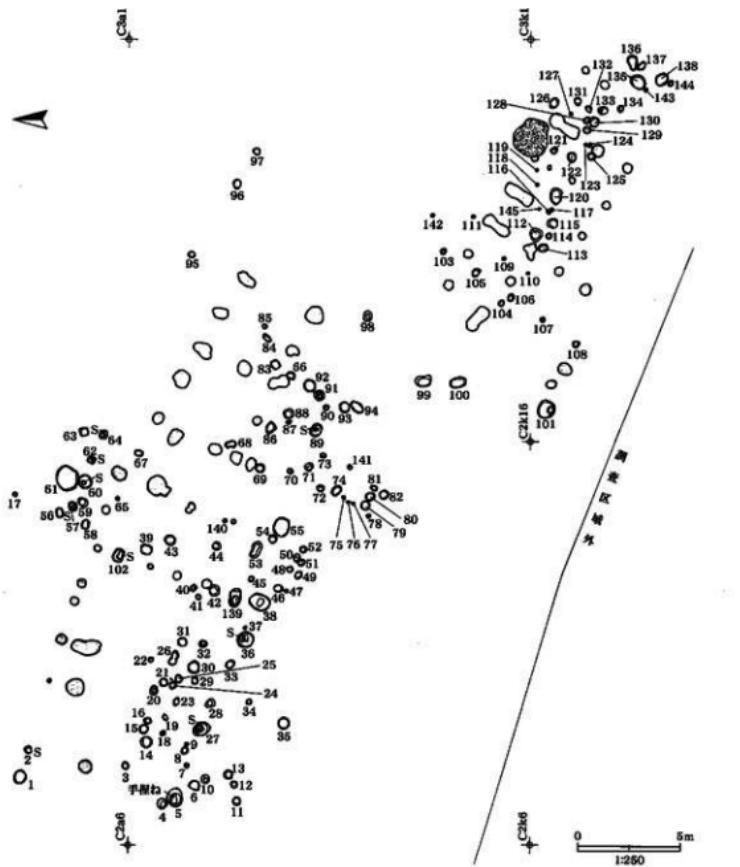
鉄製品は64～67・69・70で、64は先端の一部を欠損しているが小型の鎌と思われる。65・66は角釘で、66は両端部を欠損している。67・69は器種不明の製品である。68は近世以降の銅製煙管の吸管部分、70が近・現代に属する平ヤスリの破片である。

錢貨は7点表土中から出土している。71～76は寛永通寶で、71が古寛永、72～74の3点が新寛永である。72は火熱を受けて一部が変形しており、75と76は磨滅が著しいために不明である。77は明治10年鋳造の一錢銅貨である。

第4表 遷構外出土鉄製品一覧

No.	登録No.	区域名	出土層位	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考	図版	写真
64	107	A1区	表土	鎌	11.4	5.7	0.2	6.7	先端部欠損	25	27
65	111	試掘	表土	釘	7.2	1.7	0.7	4.2	完形	25	27
66	113	試掘	耕作土	釘	[2.9]	0.9	0.6	12.9	両端部欠損	25	27
67	108	B2区	表土	不明	[2.5]	[2.5]	1.1	2.4		25	27
69	112	試掘	耕作土	不明	[2.4]	1.3	0.4	9.2		25	27
70	110	C2区	表土	鎌	[8.6]	3.0	0.8	0.6	錯が著しい	25	27

[ ]は現存値



第21図 RZ柱穴状土坑・出土遺物

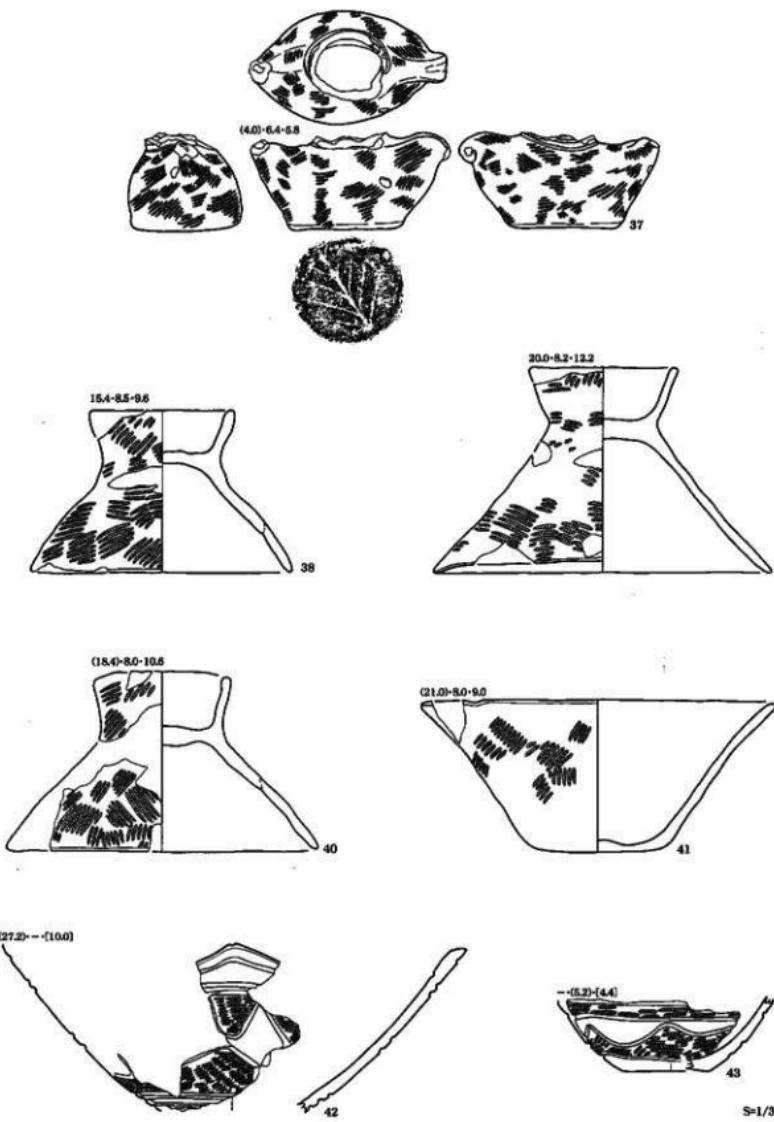
S-1/3

第5表 RZ柱穴状土坑一覧

柱穴No.	開口部cm	深さcm	形 状
1	66×61	3.6	椭円形
2	32×32	3.5	円 形
3	34×33	10.6	円 形
4	48×48	16.8	円 形
5	89×74	46.7	椭円形
6	52×44	10.7	不整形
7	24×22	24.1	円 形
8	36×31	12.2	椭円形
9	20×16	4.2	円 形
10	43×41	27.6	椭円形
11	41×38	27.0	円 形
12	34×33	32.8	円 形
13	44×42	20.5	円 形
14	56×54	20.0	円 形
15	46×42	8.2	円 形
16	40×34	30.3	椭円形
17	23×20	29.7	円 形
18	29×23	29.9	椭円形
19	27×21	27.6	不整形
20	46×30	38.2	椭円形
21	41×39	38.0	円 形
22	25×23	9.4	円 形
23	40×30	24.6	椭円形
24	36×34	36.4	円 形
25	36×37	22.3	不整形
26	71×36	31.8	不整形
27	84×65	52.6	椭円形
28	47×36	32.4	椭円形
29	38×30	25.0	椭円形
30	58×57	29.8	円 形
31	46×44	22.3	円 形
32	34×26	46.1	椭円形
33	47×35	38.8	椭円形
34	28×27	17.1	円 形
35	58×57	38.4	円 形
36	82×79	5.8	円 形
37	15×14	4.4	円 形
38	99×80	54.5	椭円形
39	57×46	38.2	椭円形
40	31×28	16.4	円 形
41	27×22	11.2	円 形
42	52×51	31.9	円 形
43	55×53	35.4	円 形
44	40×40	17.7	円 形
45	30×25	17.9	椭円形
46	43×34	31.4	椭円形
47	21×19	4.9	円 形
48	34×30	5.2	円 形
49	43×35	21.2	椭円形
50	38×37	18.0	円 形

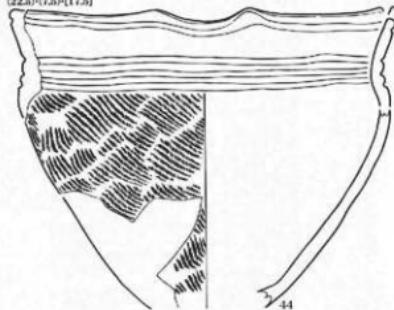
柱穴No.	開口部cm	深さcm	形 状
51	36×33	23.7	円 形
52	35×34	23.1	円 形
53	85×50	31.4	椭円形
54	41×40	37.7	円 形
55	97×88	44.1	不整形
56	47×35	24.7	椭円形
57	45×42	19.3	円 形
58	47×35	23.9	椭円形
59	48×39	45.0	椭円形
60	67×67	32.2	円 形
61	124×109	11.7	不整形
62	32×32	24.0	方 形
63	43×41	16.5	方 形
64	47×38	31.8	椭円形
65	18×18	6.4	円 形
66	51×37	14.8	円 形
67	38×29	48.2	椭円形
68	54×31	16.4	不整形
69	40×40	13.9	円 形
70	25×25	32.7	円 形
71	42×37	35.1	椭円形
72	32×31	21.1	椭円形
73	27×22	15.1	椭円形
74	47×40	91.5	椭円形
75	15×14	22.8	円 形
76	20×15	47.0	円 形
77	16×14	42.6	椭円形
78	18×18	48.5	円 形
79	44×41	21.8	円 形
80	45×42	18.3	円 形
81	42×24	12.7	椭円形
82	45×43	12.6	円 形
83	44×41	11.8	不整形
84	43×24	20.4	不整形
85	22×22	19.3	円 形
86	55×55	24.4	不整形
87	27×18	14.4	椭円形
88	48×48	44.9	円 形
89	65×52	36.4	椭円形
90	24×23	16.9	円 形
91	51×49	45.1	円 形
92	60×57	26.0	円 形
93	53×46	26.7	円 形
94	78×45	50.4	椭円形
95	33×29	15.2	円 形
96	47×46	8.8	椭円形
97	37×37	9.8	円 形
98	49×40	47.0	椭円形
99	78×52	32.3	椭円形
100	82×51	14.2	椭円形

柱穴No.	開口部cm	深さcm	形 状
101	87×77	33.3	椭円形
102	61×53	98.0	椭円形
103	30×28	14.8	円 形
104	30×26	26.2	椭円形
105	44×33	14.2	椭円形
106	35×28	31.7	椭円形
107	22×22	9.9	円 形
108	33×31	17.7	円 形
109	14×14	14.0	円 形
110	13×12	13.1	円 形
111	17×17	5.2	円 形
112	62×57	36.4	円 形
113	47×40	30.9	椭円形
114	26×26	17.7	円 形
115	49×48	45.6	円 形
116	22×21	17.1	不整形
117	17×16	33.4	椭円形
118	18×16	16.6	円 形
119	12×10	9.3	円 形
120	80×52	31.6	椭円形
121	34×34	30.4	円 形
122	48×46	21.9	円 形
123	15×14	11.9	円 形
124	26×14	19.9	椭円形
125	35×31	25.0	円 形
126	53×41	39.3	椭円形
127	17×16	11.9	円 形
128	35×26	20.7	椭円形
129	36×35	17.2	円 形
130	49×44	34.6	椭円形
131	42×37	23.5	不整形
132	39×29	28.1	椭円形
133	47×40	48.5	不整形
134	32×29	9.5	椭円形
135	78×65	89.3	椭円形
136	73×50	18.9	椭円形
137	51×30	19.8	椭円形
138	68×53	65.5	椭円形
139	93×58	58.1	椭円形
140	17×16	6.7	円 形
141	23×23	5.0	円 形
142	20×16	24.3	円 形
143	17×17	3.9	円 形
144	27×26	14.7	円 形
145	23×20	17.6	椭円形

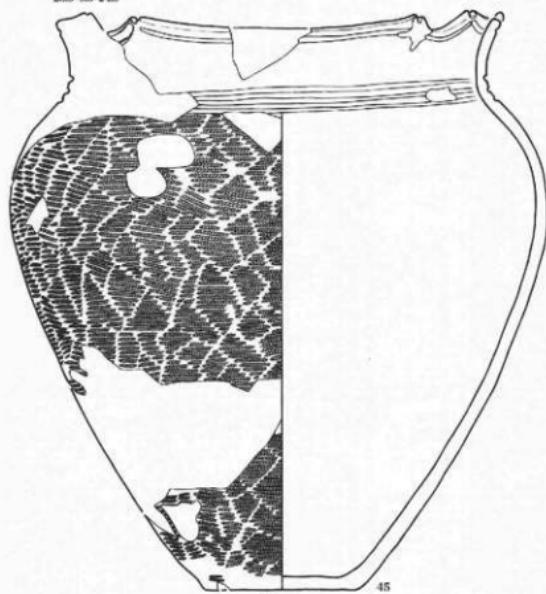


第22図 遺構外出土遺物(1)

(22.5)×(7.5)×(17.5)

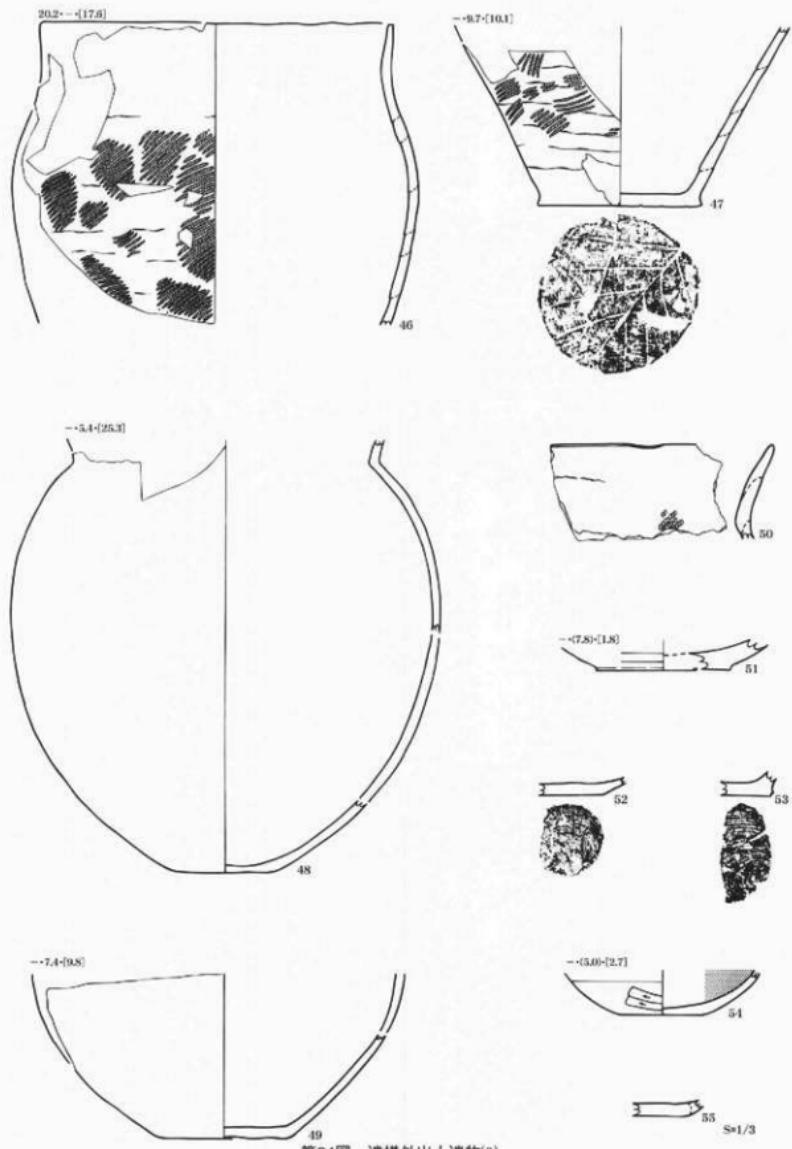


25.9×9.0×2.0

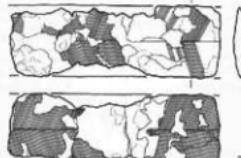
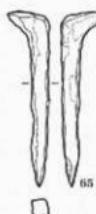
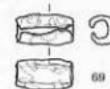
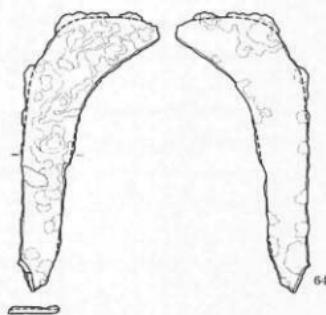
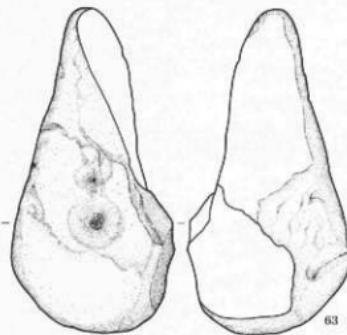
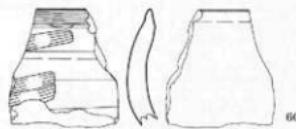
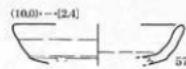


S=1/3

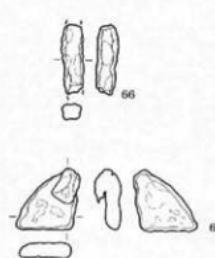
第23図 遺構外出土遺物(2)



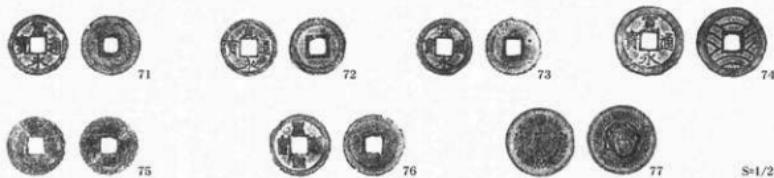
第24図 造構外出土遺物(3)



63~70±S<sup>1/2</sup>  
地±S<sup>1/3</sup>



第25図 遺構外出土遺物(4)



第26図 遺構出土遺物(5)

## V まとめ

河崎の柵擬定地から検出した遺構と遺構内出土遺物を中心に、若干の補足を加えてまとめとする。

### 1. 遺構

#### (1) 柱立柱建物跡

調査区南側から掘立柱建物跡3棟検出しているが、内1棟は調査区域外に延びる事から規模の全容が不明である。規模をみると①R B01掘立柱建物跡が桁行2間(4.20m)×梁行1間(3.00m)、②R B02掘立柱建物跡が桁行4間(8.10~8.20m)×梁行1間(4.10~4.40m)、③R B03掘立柱建物跡が桁行6間(12.90m)×梁行4間(6.00m)である。棟方向は①が北北東~南南西、Bが東南東~西北西、③が南東~北西を示しており、桁行柱間寸法は6.6~7.3尺の範囲にある。

柱穴の掘り方規格は径21cm~最大1.16mを測り、平面形は円形ないし梢円形を基調とするものが大部分を占めており、他に台形、不定形方形、長方形、瓢箪形もある。礎石を伴う建物はR B02掘立柱建物跡で、径25~40cm・厚さ4~8cmの粘板岩を打ち欠いて礎石としている。

遺物は各建物跡の柱穴埋土上中から手捏ねの蓋と器、陶器片(常滑産)、擂り破片(瀬戸産)、器種不明の土製品等を僅かに出土している。時期は陶器と擂り鉢は近世の陶器である事と柱間寸法から、これらの掘立柱建物跡は近世に属するものである。

#### (2) 門跡

調査区南側から親柱の前後に柱を配した四脚門を検出している。柱間寸法は西北西側が1.53m+1.63m、東南東側が1.50m+1.90mである。礎石柱で親柱の掘り方径は74cm~最大1.51mと規模が大きく、深さは55~60cmを測る。①R B01掘立柱建物跡と棟方向が同一である事から、近世の屋敷内に伴う門跡と推測されるものの、遺物の出土がない事から詳細は不明である。

#### (3) 土坑

土坑は主に調査区中央部から38基検出している。平面形を見ると円形、梢円形、方形、長方形、不整形、瓢箪形と多様で、円形を基調とするものが約半数を占めている。開口部の長軸径は60cm~1.70mで、深さは8cm~最大で1.28mを測る。

遺物は11基の土坑から陶器茶碗破片、角釘、鉄滓、丸釘、器種不明の鉄製品等が出土している。近世の陶器類と明らかに近代の釘等も見られ、多くは埋土の堆積状況からも時期が近・現代に属するものである。

#### (4)溝跡

溝跡は調査区南側と中央部東側から2条検出している。①RG01溝跡は両端部が調査区域外に延びている事から規模の全容が不詳であるが、北東～南西方向に長さ24.20m検出している。上幅は1.80～3.70m、深さが75～98cmを測り、壁は薙研状に掘られている。②RG02溝跡も搅乱土坑と重複する事から、詳細は不明である。確認された長さは北西～南東方向に5.70m、最大上幅が1.20m、深さが34cm前後である。

遺物は①から瓦器片、中世陶器破片(常滑窯)、かわらけ破片(流れ込み)、鉄製品、鉄滓、フイゴの羽口が出土している。時期は陶器や瓦器の年代から大きく中世～近世に属すると思われる。また、②の時期は遺物の出土がなく不明である。

#### (5)溝状造構

溝状造構は調査区中央部の南東側から7条(①RZ01～07溝状造構)、北西侧で27条(②RZ08～34溝状造構)検出している。長さは削平のために途切れる箇所も見られるが6m～最大36mで、①が22～36m範囲にある。規模は上幅が40cm～1.40m、下幅が30～80cm、深さが2～38cm前後を測る。各溝の間隔はいずれも一定の間隔で並行し①が1.0～1.40mとやや広めで、②が20～80cmと近接している。長軸方向は①が北東～南西、②が北東～南西を示している。

近年の発掘調査で長軸方向を同一に並列する造構が多く検出されており、畝間状造構、畑地跡、畑跡、畑状造構と呼称している。県内における畑地跡は昭和62年の軽米町皂角子久保遺跡が初見で、その後に北上市鬼柳IV遺跡・岩崎台地遺跡群、水沢市中林遺跡、浄法寺町コアスカ館跡、江刺市宮地II(B・D地区)遺跡・下後醍醐遺跡・宮地III A遺跡・愛宕林遺跡・岩谷城跡、大東町古戸前遺跡、平泉町本町II遺跡、二戸市大向上平遺跡・米沢遺跡・大向II遺跡・上台遺跡等で確認している。また、二戸市内の3遺跡からは、十和田a降下火山灰で覆われた畝間状造構が検出している。

これらの造構と形態を比較すると類似性はあるものの、本造構の方が幅が広く、長さは20m以上のものが多い事から畝間状造構・畑跡とは確定できなかった。時期を決める遺物は出土していないものの、北西侧で確認されたRZ08～34溝状造構の埋土上位に十和田a降下火山灰の堆積が見られる事から、平安時代10世紀以前の造構である。今後同じような類例が増加することにより、性格と用途が解明されると思われる。

#### (6)柱穴状土坑

柱穴状土坑は調査区南側を中心に大小合わせて145基余検出している。平面形は円形と梢円形が約9割を占め、平均規模は長径が42×36cm、深さが25cm前後を測る。遺物は3基の柱穴から手捏ねの蓋・器、陶器破片が出土しているだけであるが、手捏ね土器はRB01掘立柱建物跡から出土したものに類似している。時期は埋土の堆積状況から近代に属するものが混在するものの、一部は近世の屋敷内とその周辺に分布する事が見て、これらに付随する施設に関連するものが多く含まれている。

## 2. 遺物

遺物は掘立柱建物跡、土坑、溝跡から手捏ねの蓋・器、陶器破片、鉄製品、鉄滓、造構外から弥生時代の土器・石器、平安時代の土師器杯・壺、かわらけ、中世のかわらけ、瓦器・陶器、鉄製品、フイゴの羽口、錢貨等が出土している。造構に伴う遺物は一部中世のものも見られるが、近世が大部分を占めている。

手捏ね土器は、近世掘立柱建物跡の柱穴と柱穴状土坑から蓋と器がセットで出土している。器を伏せた状

態で底面近くから出土する事から、地鎮の際に使用した祭器と思われる。詳細は不詳であるが、器の中に他の遺物等の混入は確認されない。

弥生土器はすべて遺構外から出土したもので、器種は鳥形器形の注口、蓋、鉢、浅鉢、壺、壺等が見られる。他に土器と供伴出土した凹石が1点である。

注口土器は鳥形の器形をした土器で、底部が木葉底である。該期の土器は県内においても出土例が希である事から、祭祀等に使用された土器の可能性もある。

蓋は蓋部と摘み部から構成され、口径と蓋部器高から大小の器形に大別される。いずれも摘み部は、天井部の上に作出された台状を呈している。

鉢は逆台形状をした土器で、口縁部は外傾するものと外反する器形に大別される。

壺は口縁部の形態から二群に大別され、器高と法量から大小に分けられる。

A群…口縁部は外反して立ち上がり、頸部に複数の沈線が巡るもの。

B群…口縁部は直立して立ち上がり、頸部に沈線がないもの。

壺は口縁部を欠損している事から全容が不詳である。球胴形の器形で、外面は磨滅しているがヘラミガキ調整痕が見られる。

これらの弥生土器は、文様の形態と特徴から江刺市沼ノ上遺跡、花泉町中神遺跡に類似しており弥生時代前期に比定される。

今回の調査で『陸奥誌』に記述された安倍貞任が本陣を置いたとされる河崎の柵に間連する遺構は検出されなかったが、平安時代同時期の土師器壺・壺等の破片を出土する事からも、今後西側の周辺調査が進むにつれ全容が明らかになると思われる。平安時代12世紀後半の平泉柳之御所跡出土のかわらけと同様な資料もあり、平泉文化圏が当地域まで及んでいた事が十分にうかがわれる。また、出土した遺物からは弥生時代～平安、中世、近世に亘る人々の生活が営まれていた痕跡も読みとれる。

# 写 真 図 版

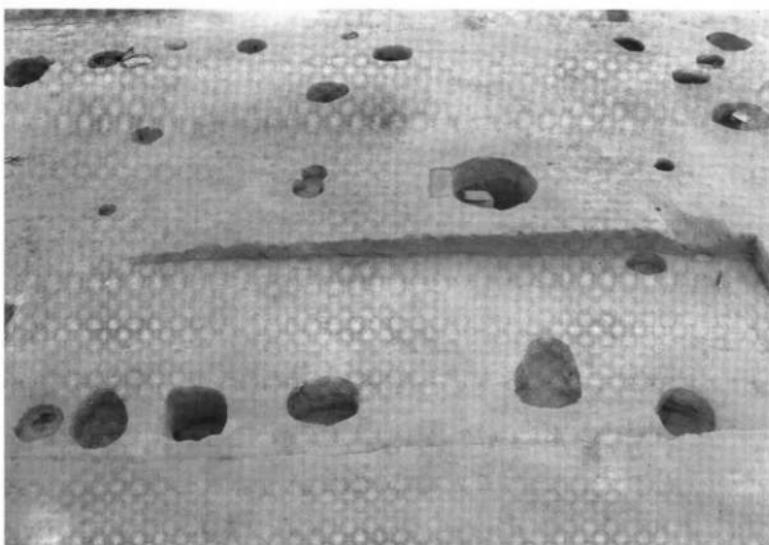


(北東から)

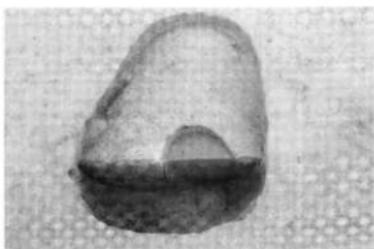


(南から)

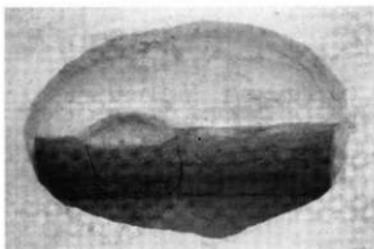
写真図版1　遺跡近景



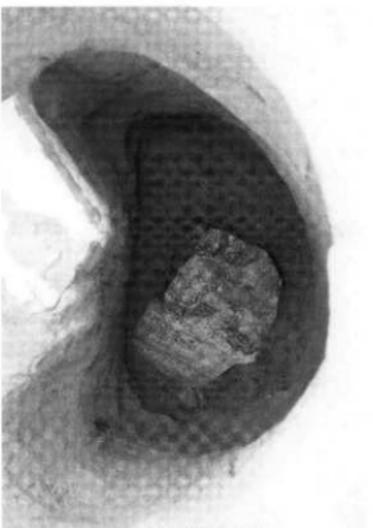
完掘（東から）



柱穴埋土断面（B1柱）

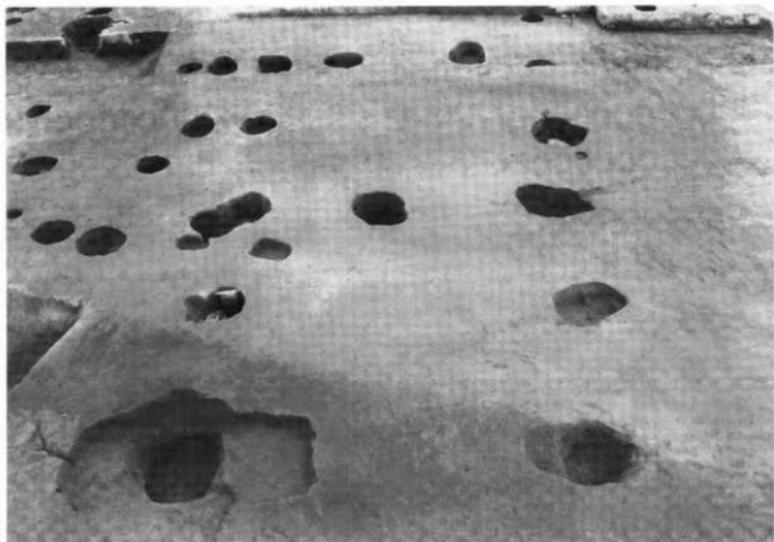


柱穴埋土断面（B2柱）

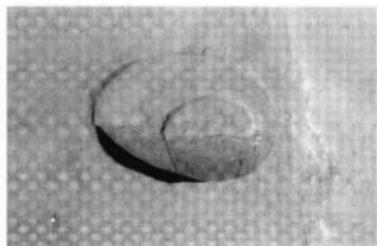


手捏ね土器出土状況（A1柱）

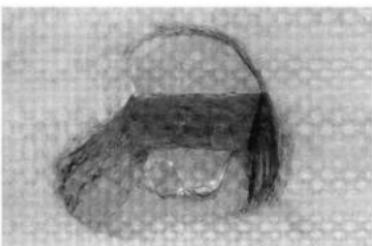
写真図版2 RB01掘立柱建物跡



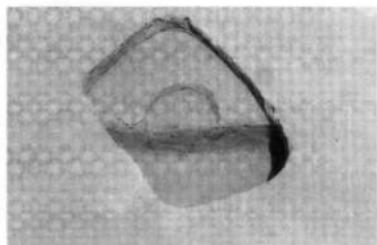
完掘（東から）



柱穴埋土断面（B1柱）



柱穴埋土断面（B3柱）



柱穴埋土断面（B4柱）



作業風景

写真図版 3 RB02掘立柱建物跡

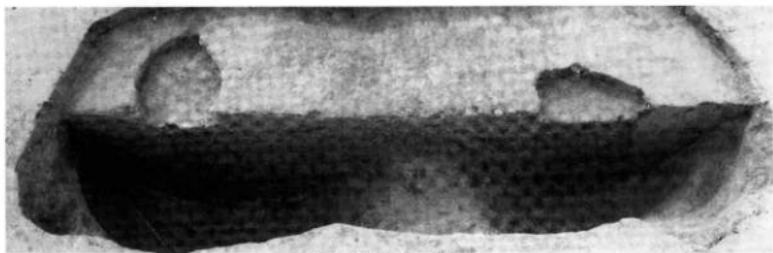


RB01・02完掘（南から）

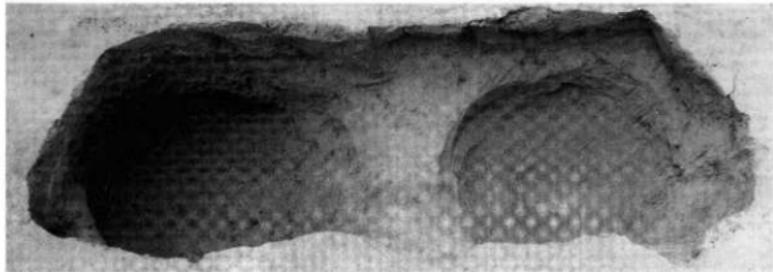


RB03完掘（西から）

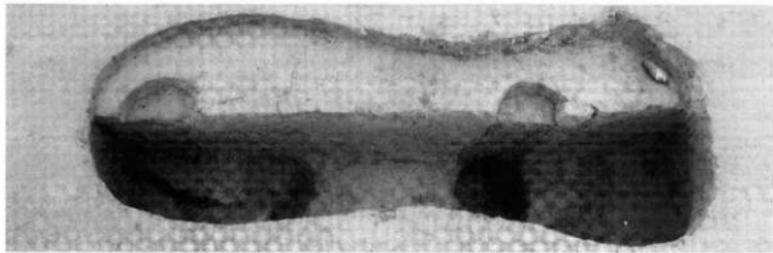
写真図版 4 RB01～03掘立柱建物跡



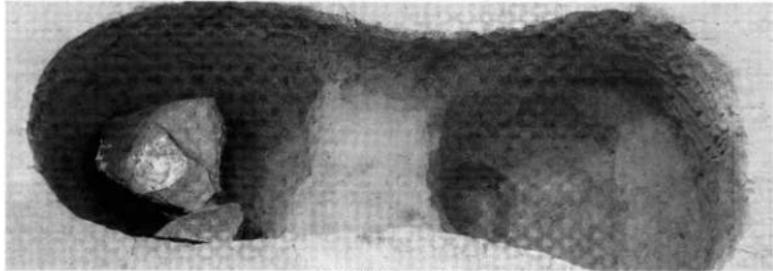
柱穴埋土断面（A4・B4柱）



柱穴充填（A4・B4柱）

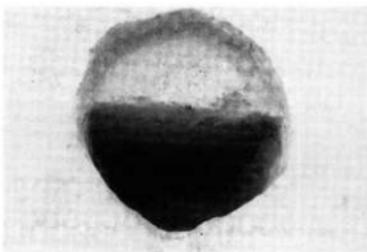


柱穴埋土断面（A5・B5柱）

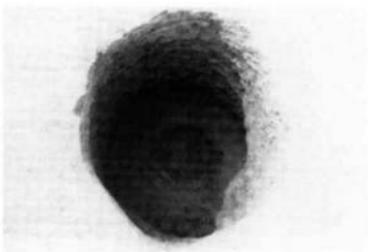


柱穴充填（A5・B5柱）

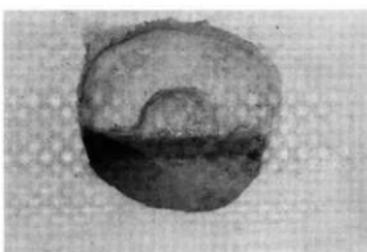
写真図版 5 RB03掘立柱建物跡(1)



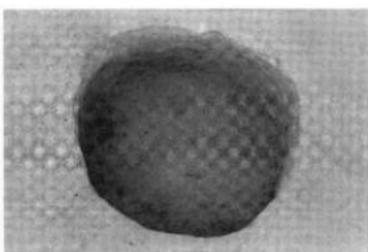
柱穴埋土断面（A2柱）



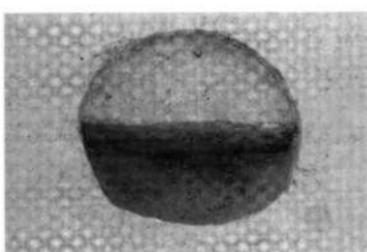
柱穴完掘（A2柱）



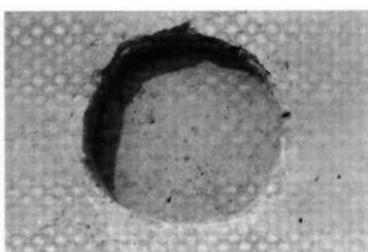
柱穴埋土断面（A3柱）



柱穴完掘（A3柱）



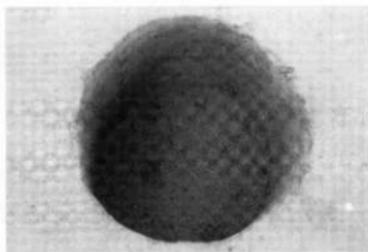
柱穴埋土断面（D4柱）



柱穴完掘（D4柱）



柱穴埋土断面（D6柱）



柱穴完掘（D6柱）

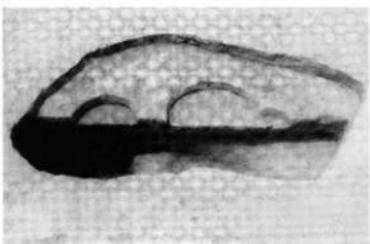
写真図版 6 RB03掘立柱建物跡(2)



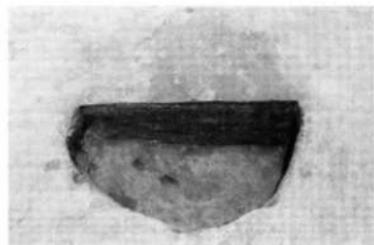
RZ門跡完掘（南東から）



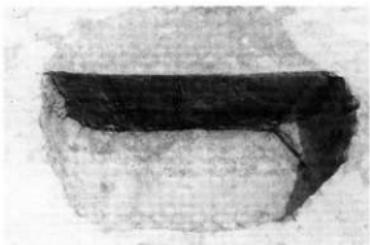
RZ門跡柱穴埋土断面（B3柱）



RZ門跡柱穴埋土断面（B4柱）



柱穴状土坑埋土断面（P38）

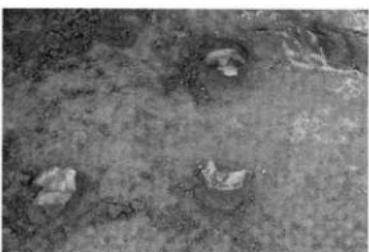


柱穴状土坑埋土断面（P55）

写真図版7 RZ門跡・柱穴状土坑



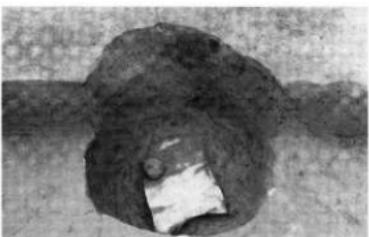
手绘土器出土状况（C II区）



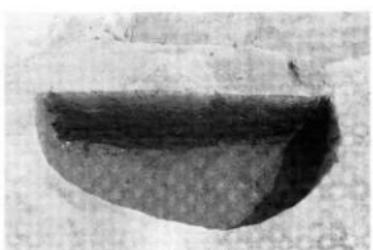
手绘土器出土状况（C II区）



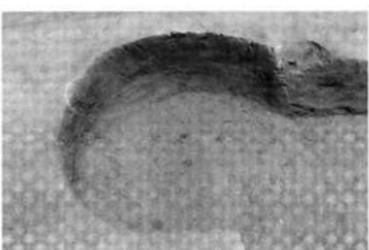
手绘土器出土状况（P5）



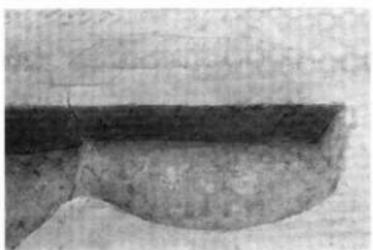
手绘土器出土状况（P5）



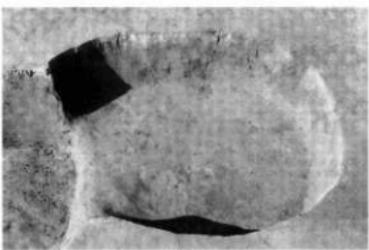
RD01 埋土断面（南一北）



RD01 実掘（南から）

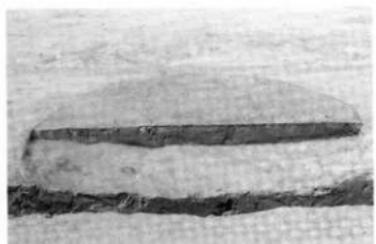


RD02 埋土断面（西一東）

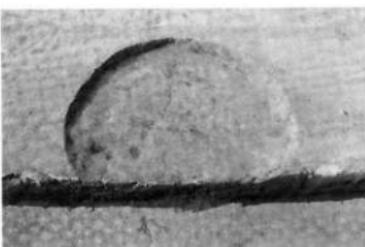


RD02 実掘（南から）

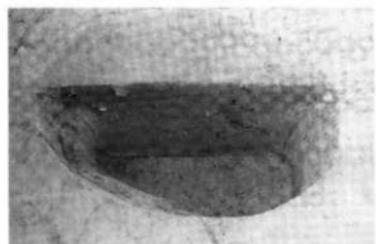
写真図版 8 遺物出土状況・RD土坑(1)



RD03 埋土断面（西一東）



RD03 実掘（南から）



RD04 埋土断面（西一東）



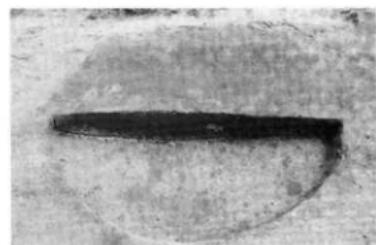
RD04 実掘（南から）



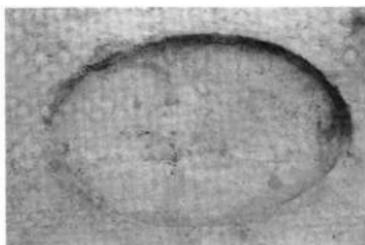
RD05 埋土断面（西一東）



RD05 実掘（南から）

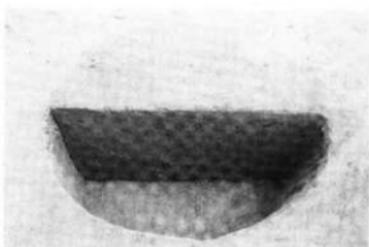


RD09 埋土断面（北西一南東）

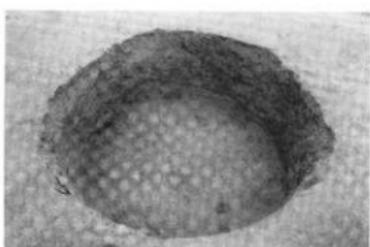


RD09 実掘（南から）

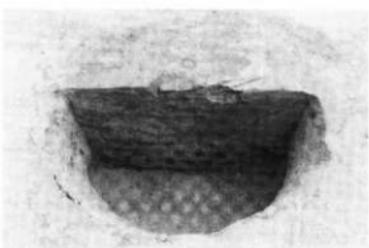
写真図版 9 RD土坑(2)



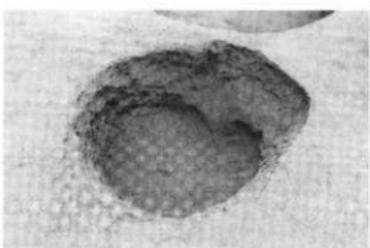
RD10 埋土断面（北西—南東）



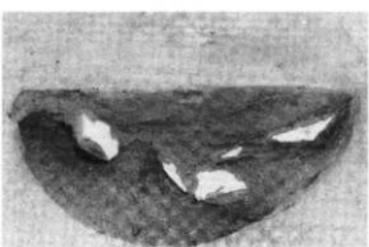
RD10 完掘（南から）



RD11 埋土断面（北西—南東）



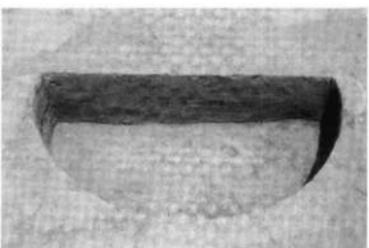
RD11 完掘（南から）



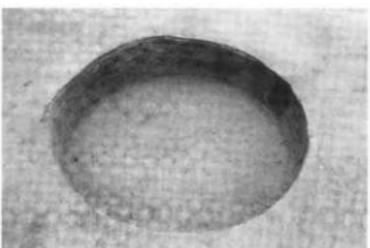
RD12 埋土断面（北西—南東）



RD12 完掘（北から）

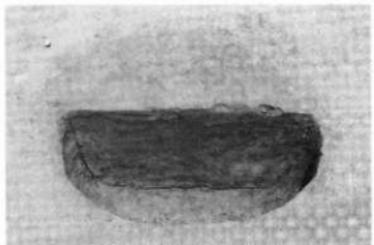


RD13 埋土断面（西—東）

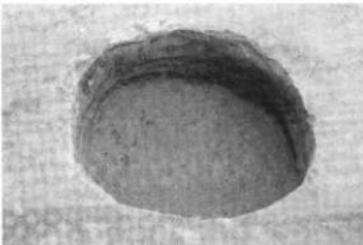


RD13 完掘（南から）

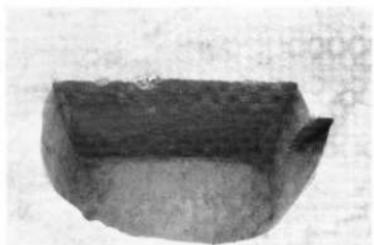
写真図版10 RD土坑(3)



RD14 埋土断面（南西—北東）



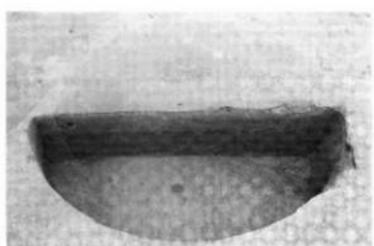
RD14 完掘（南東から）



RD15 埋土断面（北—南）



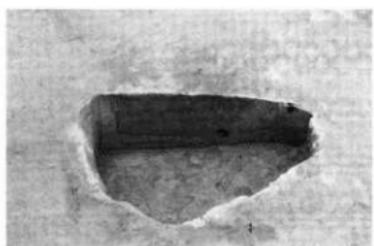
RD15 完掘（西から）



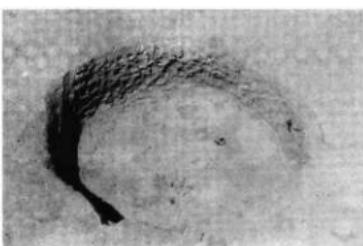
RD16 埋土断面（西—東）



RD16 完掘（南から）

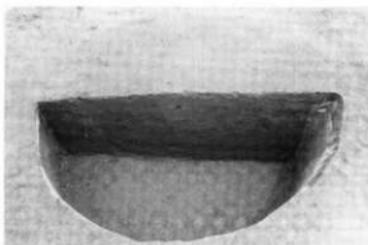


RD17 埋土断面（北西—南東）



RD17 完掘（南から）

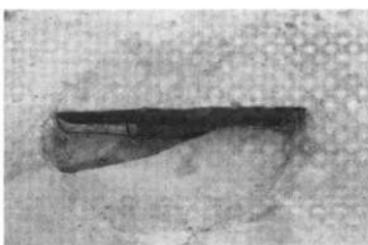
写真図版11 RD土坑(4)



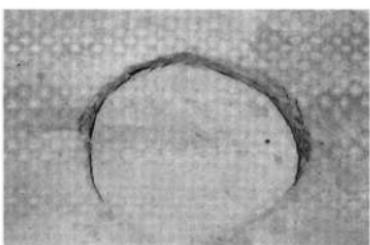
RD18 埋土断面（北西—南東）



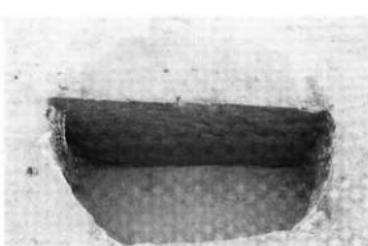
RD18 完掘（西から）



RD19 埋土断面（北西—南東）



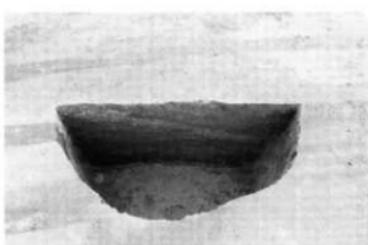
RD19 完掘（南から）



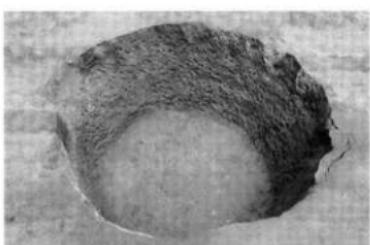
RD20 埋土断面（北西—南東）



RD20 完掘（南から）

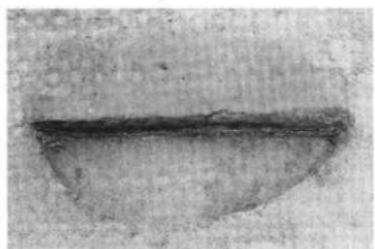


RD21 埋土断面（北西—南東）

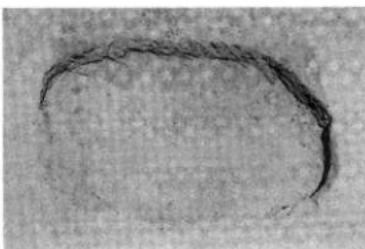


RD21 完掘（南から）

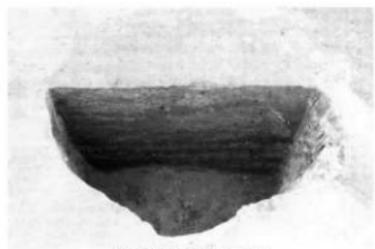
写真図版12 RD土坑(5)



RD22 埋土断面（北西—南東）



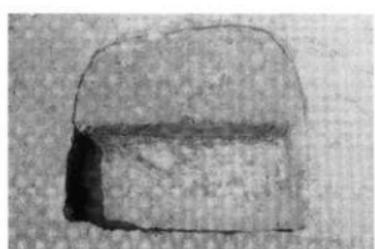
RD22 完掘（南から）



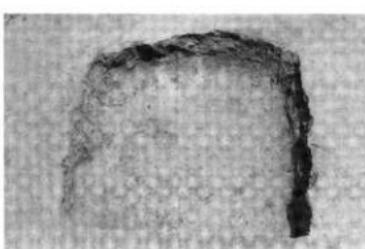
RD23 埋土断面（北—南）



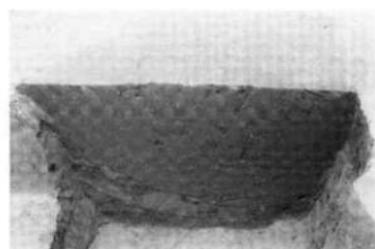
RD23 完掘（東から）



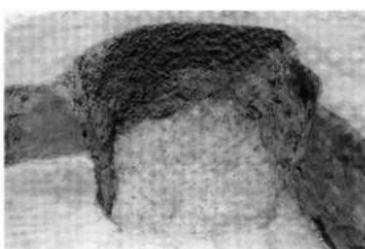
RD25 埋土断面（西—東）



RD25 完掘（南から）

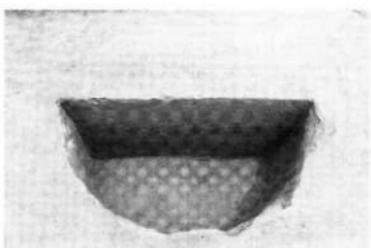


RD26 埋土断面（南—北）

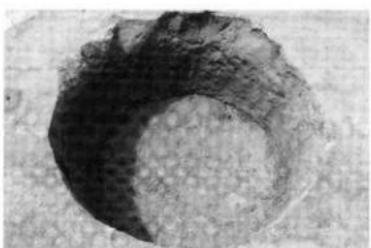


RD26 完掘（東から）

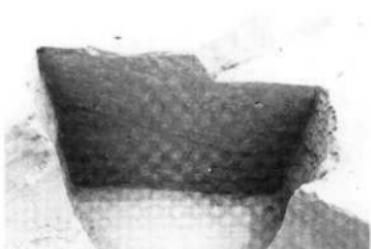
写真図版13 RD土坑(6)



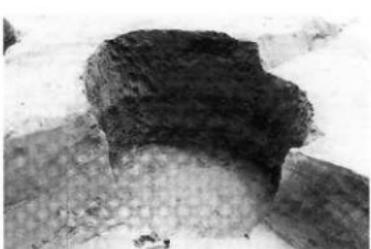
RD27 埋土断面（西一東）



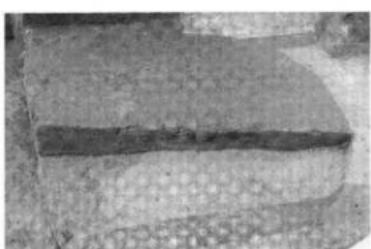
RD27 完掘（北から）



RD28 埋土断面（北一南）



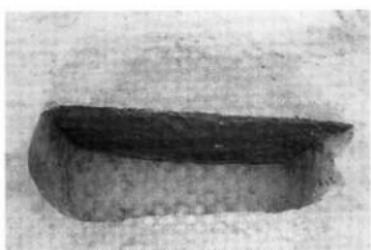
RD28 完掘（西から）



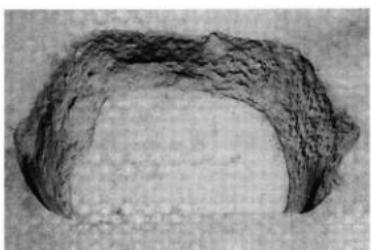
RD29 埋土断面（西一東）



RD29 完掘（南から）

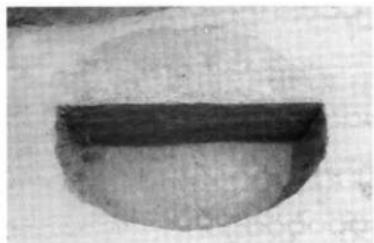


RD30 埋土断面（北西一南東）

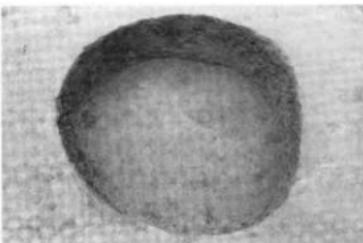


RD30 完掘（南西から）

写真図版14 RD土坑(?)



RD32 埋土断面（西一東）



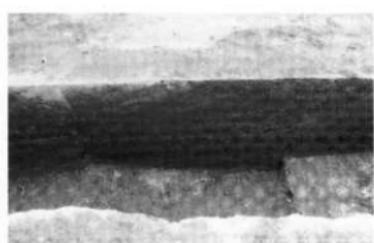
RD32 完掘（南から）



RD31 埋土断面（西一東）



RD31 完掘（南から）



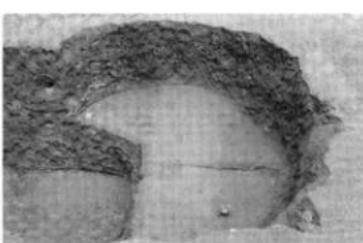
RD33 埋土断面（西一東）



RD33 完掘（南から）

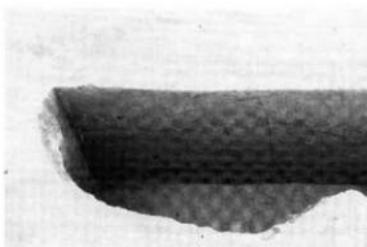


RD34 埋土断面（西一東）



RD34 完掘（南から）

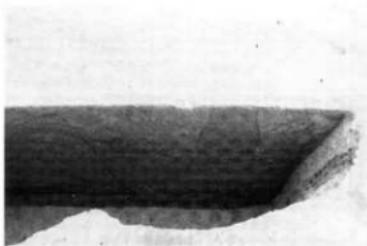
写真図版15 RD土坑(8)



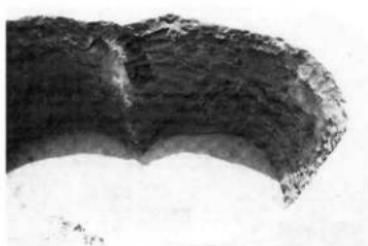
RD35 埋土断面（西一東）



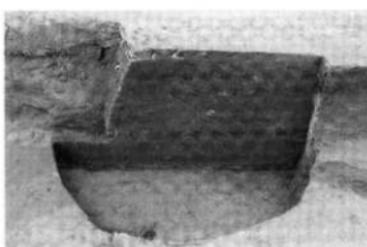
RD35 完掘（南から）



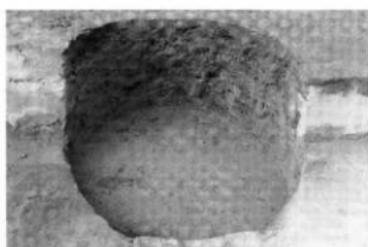
RD36 埋土断面（西一東）



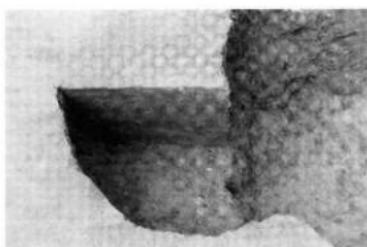
RD36 完掘（南から）



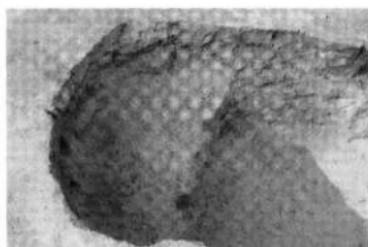
RD37 埋土断面（西一東）



RD37 完掘（南から）



RD38 埋土断面（西一東）

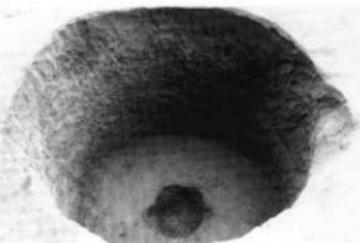


RD38 完掘（南から）

写真図版16 RD土坑(9)



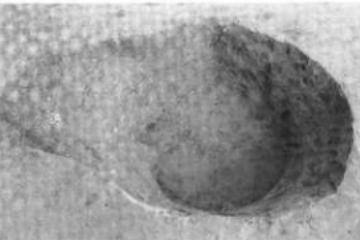
RD39 埋土断面（西一東）



RD39 完掘（南から）



RD40 埋土断面（北西一南東）



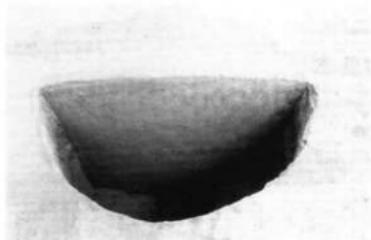
RD40 完掘（南から）



RD41 埋土断面（北西一南東）



RD41 完掘（南から）



RD42 埋土断面（西一東）

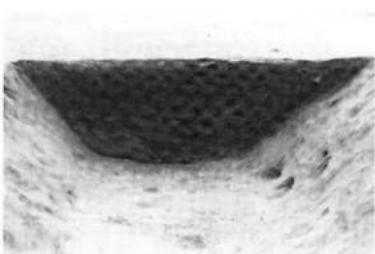


RD42 完掘（西から）

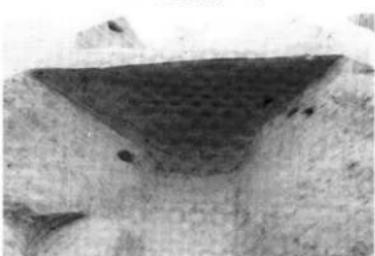
写真図版17 RD土坑⑩



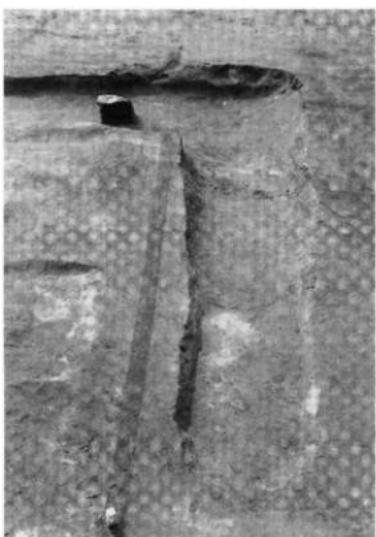
RG01 完掘（北東から）



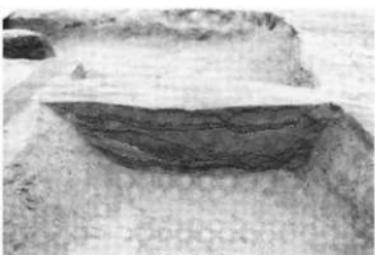
RG01 埋土断面 (A-A')



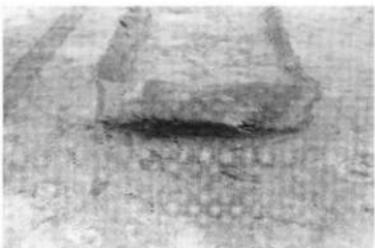
RG01 埋土断面 (B-B')



RG02 完掘（南東から）

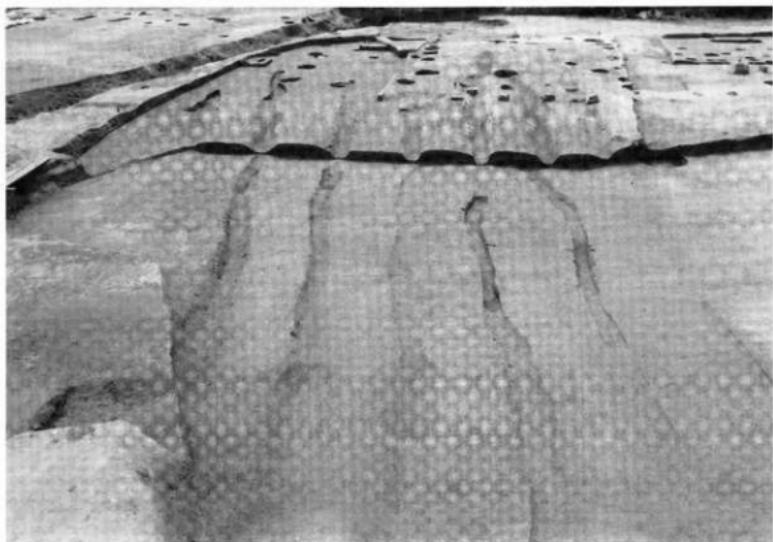


RG02 埋土断面 (A-A')

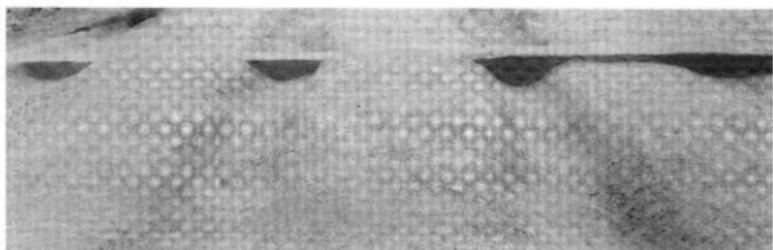


RG02 埋土断面 (B-B')

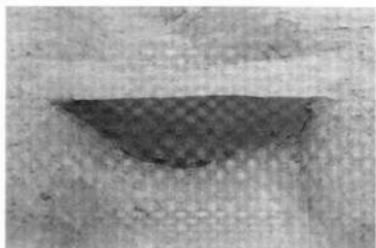
写真図版18 RG溝跡



RZ01～07 実掘（北から）



RZ04-03-02-01 埋土断面 (C-C')



RZ03 埋土断面 (C-C')

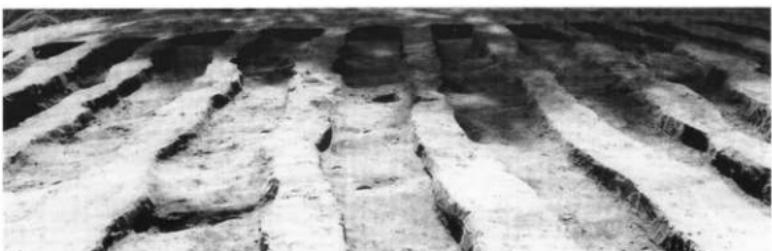


RZ04 埋土断面 (C-C')

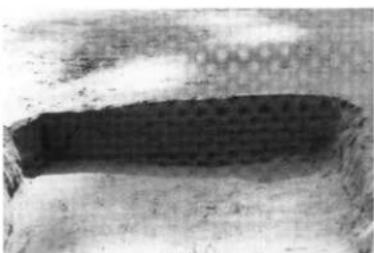
写真図版19 RZ溝状造構(1)



RZ08~24 実観（南から）



RZ10~18 実観（北から）

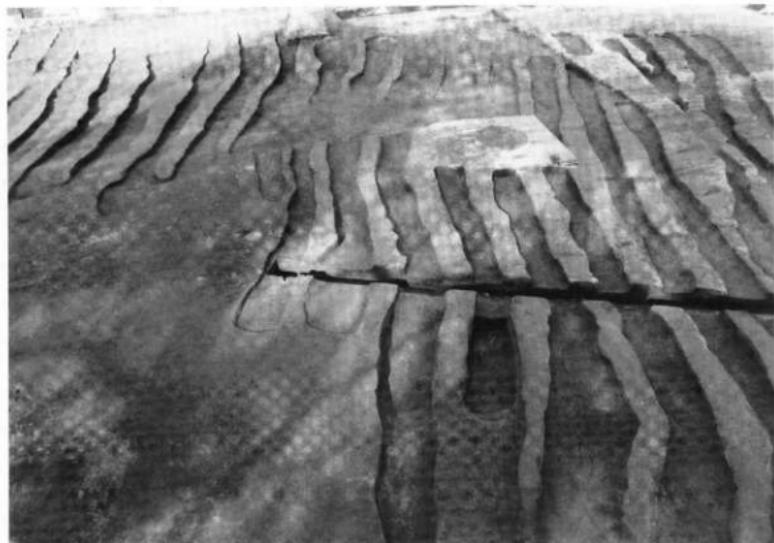


RZ11 塗土断面 (A-A')

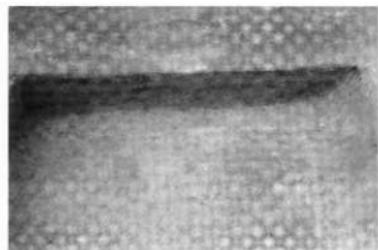


RZ12 塗土断面 (A-A')

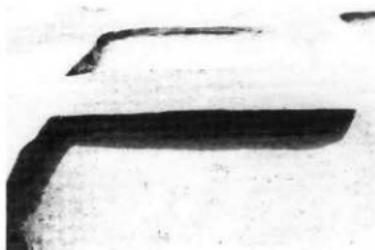
写真図版20 RZ溝状遺構(2)



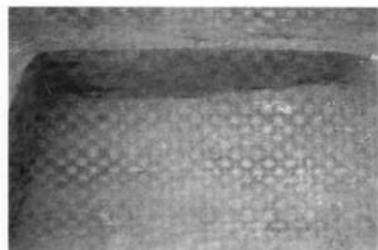
RZ19～29 完掘（南から）



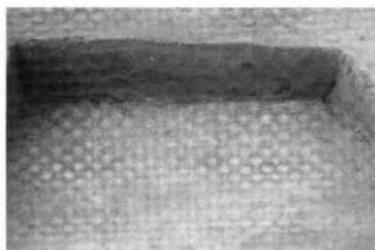
RZ19 埋土断面（B-B'）



RZ23 埋土断面（B-B'）



RZ24 埋土断面（B-B'）

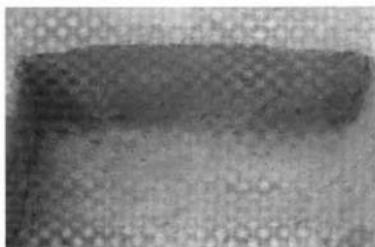


RZ25 埋土断面（B-B'）

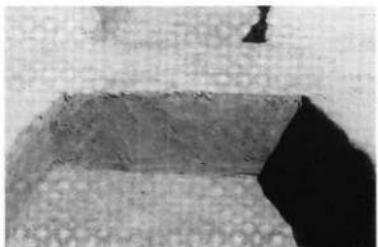
写真図版21 RZ溝状遺構(3)



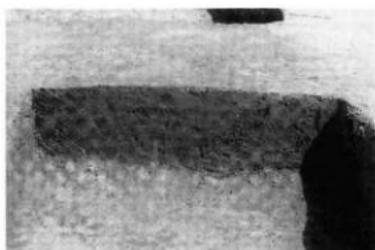
RZ23～34 完掘（南から）



RZ26 埋土断面（B-B'）



RZ28 埋土断面（B-B'）



RZ30 埋土断面（B-B'）



RZ31 埋土断面（B-B'）

写真図版22 RZ溝状遺構(4)



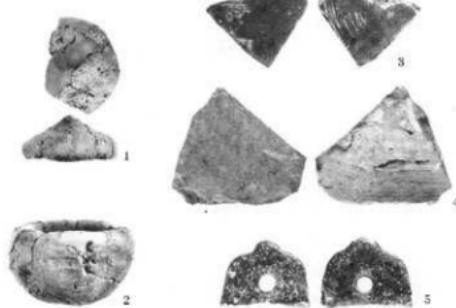
完掘 (C2区西侧)



完掘 (C2区東側)

写真図版23 RZ柱穴状土坑

RB獨立柱建築物跡

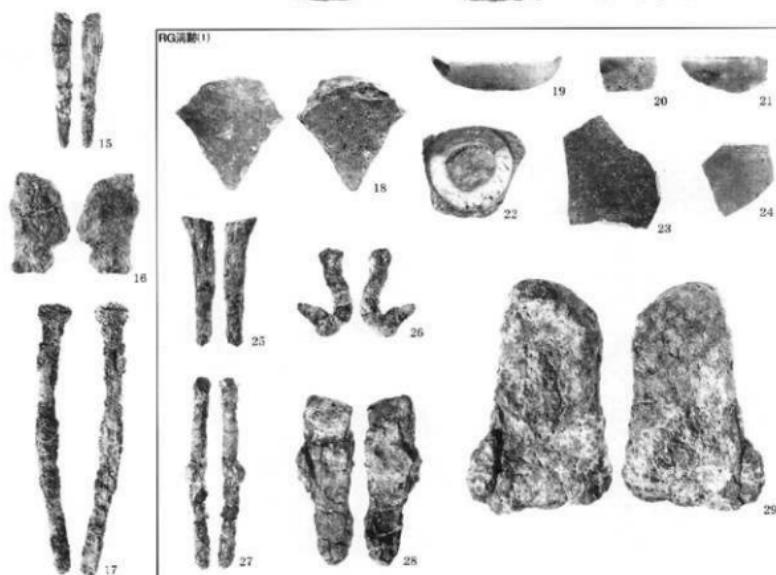


RD土坑

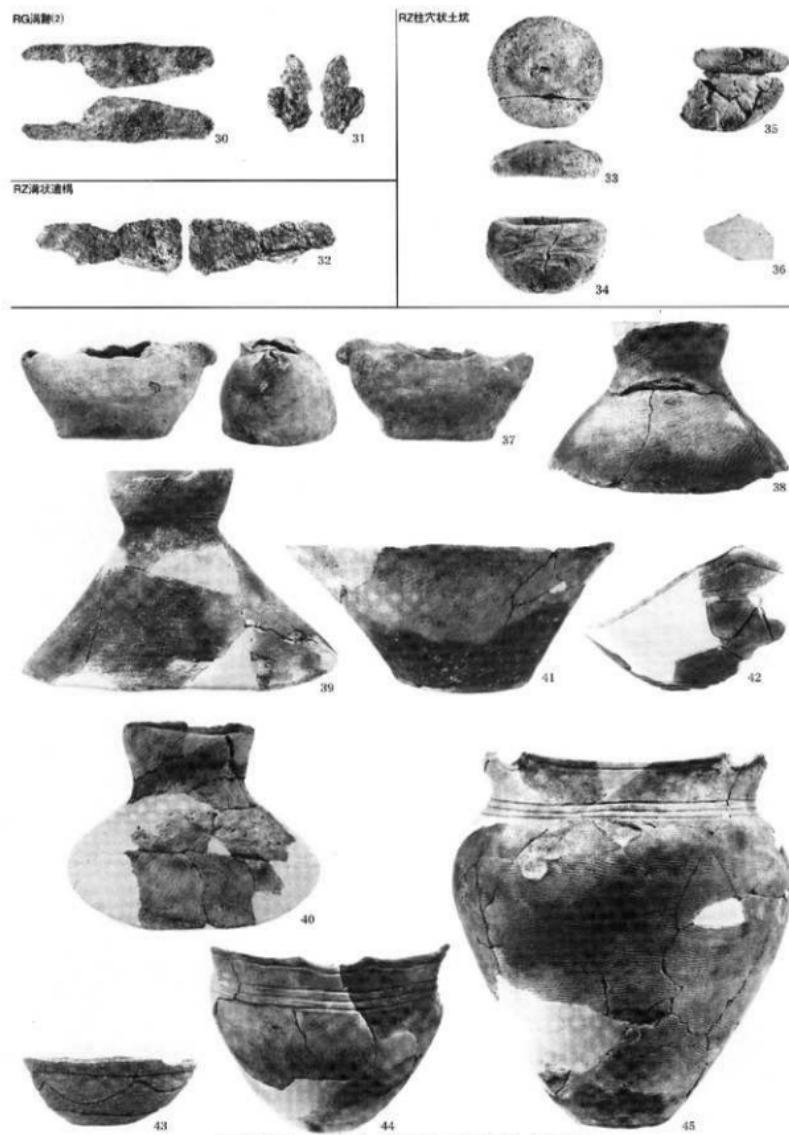


12 13 14

RG洞跡(1)



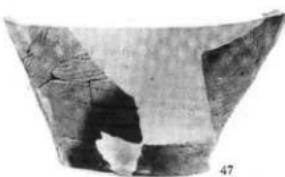
写真図版24 遺構内出土遺物(1)



写真図版25 遺構内出土遺物(2)・遺構外出土遺物(1)



46



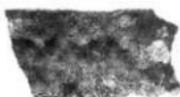
47



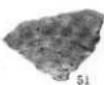
48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61

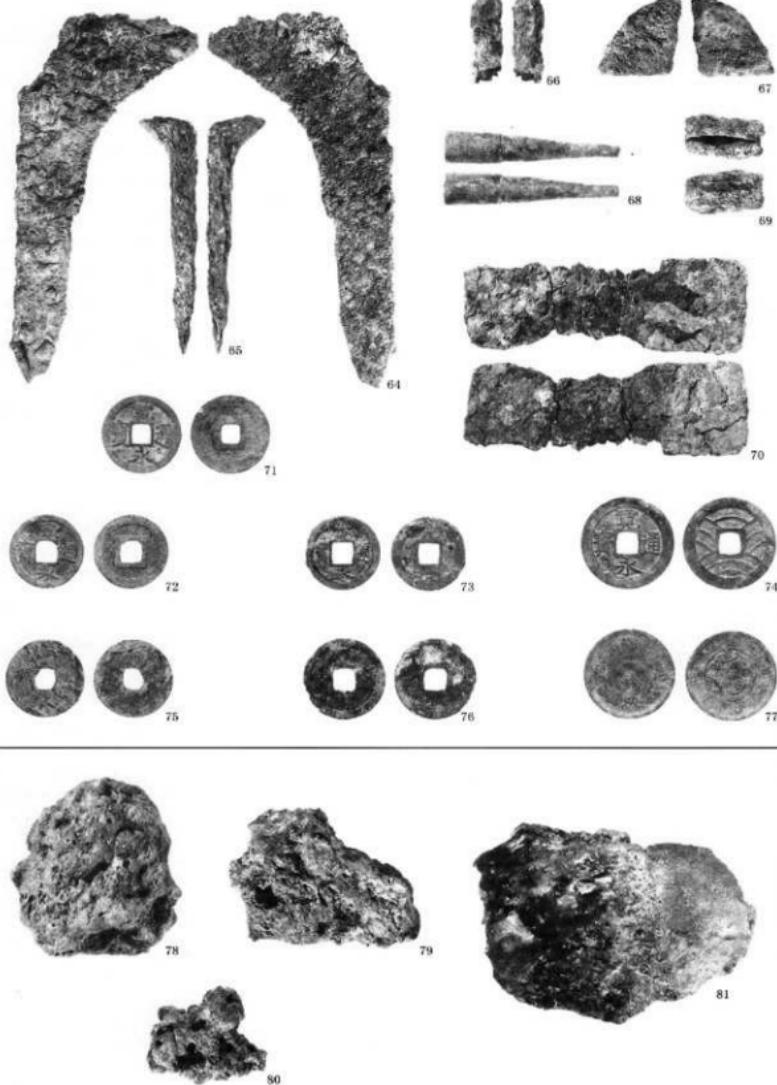


62



63

写真図版26 遺構外出土遺物(2)



写真図版27 遺構外出土遺物(3)・鉄滓他

## 報告書抄録

ふりがな	かわさきのさくぎていちはっくつちょうさほうこくしょ					
書名	河崎の橋擬定地発掘調査報告書					
副書名	床上浸水対策特別対策事業関連遺跡発掘調査					
巻次						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第371集					
編著者名	高橋義介・島原弘征					
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター					
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL 019-638-9001					
発行年月日	西暦2001年10月30日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °°°	東経 °°°	調査期間	調査面積
河崎の橋擬定地	岩手県東磐井郡川崎 村字川崎83-1ほか	03426 OE09- 1173	38度 54分 5秒	141度 15分 23秒	2000.04.18 ~ 2000.11.01	4,680m <sup>2</sup>
所収遺跡名	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	
河崎の橋擬定地	北上川の洪水 対策堤防建設 整備事業に伴 う緊急発掘調 査	集落跡・ 散布地	弥生時代		土器（鳥形土器・高坏 ・壺・蓋等） 石器（凹石）	
			縄文時代		石器剥片	
			平安時代		土器（土師器坏・壺・ かわらけ）	
			中世	溝跡1条	土器（かわらけ・陶磁 器・手捏ね）	
			近世～	掘立柱建物跡3 棟、門跡1基、 溝跡1条、柱穴 状土坑145基等	陶磁器 鉄製品（刀子・釘） 古錢（寛永通寶） 煙管 フイゴの羽口	
			近世～近代	土坑7基		
			時期不明	溝状遺構34条 土坑31基		

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	伊藤民也	副所長	高橋正儀
〔管理課〕			雄重子
管理課長	吾光美	照光邦	代子
管理課長補佐	正善直	橋木藤	佐知澄
"	多加志	澤	重徹
主査	立花	高佐加湯	宏夫
〔調査第一課〕		〔調査第二課〕	一之男
調査第一課長	佐々木	調査第二課長	彦郎
課長補佐	清義内	佐佐木	紀子
"	秀	橋川子	知子
文化財専門員	二眞信健	部坂田	澄
文化財調査員	則	藤木藤	重
"	達昭	原澤沢	佐
"	直正	村澤木	邦
"	克幸	部川田	美
"	あ貴	田	智
"	準	藤野	紀
"	忠克		寛
"	浩弘		
"	絵弘		
"	信		
"	真由		
"	恵		
"	ひかり		
期限付調査員	佐々木	〔期限付調査員〕	
"	横山田	"	
"	森石田	"	
"	大原木原野	"	
"	松沢居子	"	
"	柴葉村	"	
"	藤池上多木村	"	
"	漸山原村	"	
"	林藤池上又田	"	
"	部村	"	
"	北高丸島中江	"	
"	菊井川吉坂木	"	

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第371集

**河崎の柵擬定地発掘調査報告書**

床上浸水対策特別対策事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成13年10月25日

発 行 平成13年10月30日

発 行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019)638-9001

FAX (019)638-8563

印 刷 第一印刷有限会社

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ四丁目6番40号

電話 (019)646-6001

---